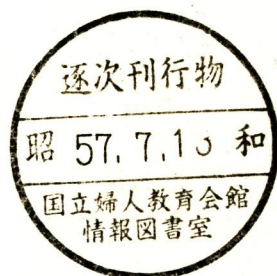


女性史研究

特集 近代の女キリスト者



第14集 '82・6

編集・家族史研究会

ないよう

特集 近代の女キリスト者

天折の先駆者・富井於菟	小松 とき	1
近代熊本の女キリスト者たち	光永 洋子	2
花陵会のこと	林 葉子	25
天草の天主堂をたずねて	小柴 雅子	34
母たち (7)	訳・石原 通子	40
カット	徳永 真理	

夭折の先駆者・富井於菟

とみい おと



小松とぎ

富井於菟の名を知る人は少ない。近代日本女性史の第一頁に必ず登場する岸田俊子、福田英子と並んで「民権女性三羽鳥」と謳われながら、於菟の名は女性史の表には殆んどあらわれていない。しかし於菟一七才の時兄に書いたという「游学ヲ請フノ書」（日本婦人問題資料集成第八巻一一六頁）には明治初年の日本女性の暗い道に炬火をかかげる先駆者の一人としての情熱がみなぎっている。

於菟は慶応二年、兵庫県竜野町一〇九一番地富井定助の三女として生まれている。学問を好み、一七才の時、上掲の書を家兄に残し、当時京都に在った岸田俊子を頼って家出同様にして出郷、まもなく上京して福田英子との交友が始まり、肝胆相照らし姉妹の約を結び、行動を共にし、自由党左派の運動に協力する仲となるが、英子が捕えられ獄に下った後、於菟はキリスト教に入信し、巖本善治の明治女学校の創業に参加して、自由と人権への期待をキリスト教的教育の実践に見出すに至るのである。これは、当時の自由民権運動の最も進歩的な指導者たちすらも、性道德などにおいては前近代的な封建的モラルから殆んど脱していなかった日本人に対して、近代的人間のモラルを掲げ、男女同権、一夫一婦意識、売淫否定などを高唱し、若い青年男女に近代的自我を促し、婦人解放の重要な過

程を示すものである。こうして於菟は明治女学校の教師の仕事に没頭したが、その抱負や才能を生かさないうちに、わずか二〇才の若さで東京第一病院でその短い生涯を閉じてしまったのである。

私は、わが郷土、竜野が生んだ富井於菟への思慕止みがたく、一日、竜野市を訪ねた。竜野は兵庫県西播の小京都とも呼ばれる古びた城下町で、駅周辺の都市化された喧噪を離れると、未だに百年の風雪に耐えて来た古い商家が建ち残り、於菟の生家、富井酒店もその中に昔ながらの面影を残していた。しかし地元は於菟の名前すらも知らなかったのである。富井酒店の当主は、母や伯母から聞いたという於菟伝を語ってくれたが、資料となるものは何一つ残っていない。わずかに於菟の墓は東京谷中の墓地にひっそり建っていると知らされただけだ。於菟がもう少し延命されていたなら、婦人解放思想の形成、展開の上にとんなにか大きな軌跡を残されたらうと、惜しまれてならないのである。

（兵庫県婦人運動史研究会）

近代熊本の女キリスト者たち

光 永 洋 子

私たちは少しずつ勉強してきたことをまとめ、『近代熊本の女たち』二巻を刊行したが、ここでの女たちのうち半分ほどは、明治のはじめにキリスト教をうけ入れた女たちであった。それに熊本の後進性は宣教師たちによむにやまれぬ情熱をもやさせて、社会事業と女子教育を熊本に根づかせていることもあきらかにされた。

それで、近代になっての熊本でのあわただしさのなかで、キリスト教がどのようにしてつたわり、女たちにどのようなようにしてうけいれられてきたかを、男たちのありかたをにらんで考えてみなければならぬのだが、ここではそのための資料をまとめてみた。

(一) 組合教会

(1)明治四年に横井小楠の兄の子どもである横井大平の努力によって、熊本に公立の洋学校が開かれ、フルベッキの紹介によるアメリカの退役陸軍砲兵大尉レロイ・ランシング・ジェーンズが教師として招かれた。ジェーンズの妻はサンフランシスコの第一会衆教会の牧師スカッター博士の娘であり、ジェーンズじしんも敬虔なキリスト教徒であった。明治六年に外国の圧力によって切支丹禁制の高札がおろされると、彼は自宅で聖書研究会をはじめた。長崎から英語と漢訳の聖書、伝道用の小冊子や、絵入りの立派な本なども送られてきて、生徒以外の人たちも話を聞きにあつまって、盛会であったらしい。ジェーンズの教えは次第に熱をおび、多感な洋学校の生徒

たちの信仰は高まり、明治九年一月三〇日の早暁、花岡山上で三五名の青年たちによって奉教の誓がむすばれた。長崎にいた宣教師たちの反応ははやく、英国監督教会のモンドレルが、次に改革派のスタウトが受洗をすすめにやってきたが誰も応ぜず、同志社のデイヴィスの提案で、ジェーンズじしんが四月三日に洗礼をさすけた。横浜バンド、札幌バンドとともに、日本のプロテスタントの三つの大きな流れである熊本バンドはこのようにして生まれたのであった。

この事件によって洋学校は廃校になり、熊本を去らねばならなくなったジェーンズは、教え子たちのその後の教育を、その前年に新島襄によって開校された京都の同志社に託した。新島襄は一八四三(天保一四)年一月一四日に上州安中藩の江戸屋敷で、祐筆職の新島民治の長男として生まれた。二二歳のとき函館より出国し、リンカーン大統領が暗殺された直後のアメリカに渡った。九年後の明治七年にマサチューセッツ州のアンドーヴァー神学校を卒業し、アメリカンボードの宣教師補となって帰国した新島は、D・C・グリーン、J・D・デイヴィス、J・C・ペリーらの宣教師に迎えられた。このころアメリカンボードの八組の宣教師夫妻と三人の女宣教師が関西で伝道にあたっており、新島の帰国した年には、摂津第一基督公会(のちの神戸教会)と梅本町公会(のちの大阪教会)が創立されていた。このような状況のなかで、京都府顧問である山本寛馬とデイヴィスの協力をえて、一月二十九日同志社英学校は創立

されたのであった。同志社で神学教育をうけた熊本バンドの青年たちは、優秀な伝道者となって日本各地で布教をはじめることになる。

(2)熊本バンドの青年たちの家族にとって、キリスト教は何であったかを、矢嶋家の姉妹について考えてみたい。矢嶋家の六女である楳子にとっては、別れた夫の許にのこしてきた息子林治定が洋学校で学び、熊本バンドの一員となった。楳子は明治五年に兄直方の看病のために上京し、ソルー夫人をして、築地新栄女学校の教師となる。楳子のもとには息子の治定や海老名弾正、姪の徳富初子や横井みや子らが訪れて、キリスト教にふれる機会は多く、姉妹の中では一ばんはやく明治一二年に新栄教会のタムソンより受洗した。矢嶋家の五女である横井つせ子は、夫の小楠がヤソの疑をかけられて京都で暗殺されて七年目、期待をかけた息子の時雄ばかりか、娘のみや子までがキリスト教を信奉したので、身の置き所がなくなり切腹さわざまでおこした。けっきょく彼女は、妹の楳子について、夫小楠の兄時明の未亡人清子、一生を横井家のためにつくした田上寿賀とともに、明治一四年に、息子時雄が初代牧師となっていた愛媛県の今治教会で、海老名弾正によって受洗している。のちに時雄が挫けそうになったとき、それをあげましたのは母であったと、その信仰のかたさを海老名は語っている。海老名は明治一五年に時雄の妹みや子と結婚した。弾正・みや子の二女である大下あやさんは八〇歳になられるが、お元気で京都で暮らしておられる。

矢嶋家の四女久子は、息子猪一郎(筆名は蘇峰)と四女の初子のキリスト教信仰におどろきあわてたが、夫の一敬がどうすればキリスト教をおさえることができるかを福沢諭吉に相談に行った留守中

に、三年坂メソジスト教会の飛鳥賢次郎より受洗した。明治一六年のことである。当時まだ熊本に組合教会がなかったからであるが、二年後には久子の長女の山川常子、次女の河田光子、三女の大久保音羽子とその娘落実(のちの久布白落実、幼児洗礼であった)、それに次男の健次郎(筆名は蘆花)、長男猪一郎の妻静子と静子の兄倉園秀雄が、やはりメソジスト教会の飛鳥賢次郎より横井時雄の立会いで洗礼をうけた。そしてこのこされたさいこの一人である徳富一敬も、明治四〇年に受洗した。八六歳であった。家族の人たちの所属する小崎弘道の靈南坂教会でなく、本郷教会で海老名弾正より受洗したが、「一門の親戚列座の上での信仰告白」は、見守る教会員たちにも感激的なできごとであったことを、『本郷教会五十年史』は伝えている。横井小楠の直弟子のなかで、あるいはまた矢嶋姉妹の夫たちのなかで、たった一人の受洗者であった。

久子の子女教育は徹底したものがあつた。長女の常子には養蚕を、次女光子には織物を、三女音羽子には製糸をというように、音羽子を長野治平とともに群馬県の富岡製糸所へ学びに行かせている。大江の屋敷に織物工場を建てて、光子夫妻の仕事として力織の生産をさせたのも久子であった。負けきらいで頭のよい初子には洋学を勉強させた。二歳年下の従妹横井みや子とともにジェーンズ夫人の教育をうけ、夫人が出産で勉強をつづけることができなくなつてからは、堂々と男生徒とともにジェーンズの教えをうけている。キリスト教をしたのも熊本バンドの人たちと同じであった。洋学校が廃校になったあとは、弟の蘇峰と行動を共にして、東京で、京都で勉強をつづけるが、これは久子の配慮であったのかもしれない。明治一五年に蘇峰が大正義塾をひらいたころは、初子も手

助けをしていたものの、更に勉強の必要をかんじて上京し、桜井女学校々長であった叔母楯子のもとに身を寄せて、エリザベス・ミリケンについて保育学を学んだ。そして明治一六年に麹町教会で受洗したが、母の久子の受洗と前後している。二年後に海老名夫妻の媒酌で群馬県安中の湯浅治郎の後妻となる。安中は新島襄の出身地で、新島の影響をうけたキリスト教徒が多く、海老名は安中教会を牧らしていた、湯浅は明治一五年に群馬県が全国にさきがけて廢娼を決議したときの県会議長であった。

明治一九年六月、万国婦人矯風会のレビット夫人が来日し、東京、神戸、岡山、長崎など各地で禁酒の講演をし、また青年男子にむかって、純潔は男女平等だということを説いた。一夫多妻の日本人にとってこれはショックであったにちがいない。夫の酒乱がいやで、乳呑子の達子をつれて実家へかえり、姉たちの家に転てんと居候をし、女の経済的自立の必要を身をもって体験していた楯子は、同志の人たち五十数人と東京基督教婦人矯風会を設立する。この年は、日本基督教伝道会社の年会ではじめて組合教会の名称がきめられ、未開拓の東京に伝道を開始することになり、海老名弾正は湯島に伝道所をひらき、横井時雄は今治教会牧師を辞任して上京する。蘇峰もまた大江義塾をたたくで、父母の敬・久子ともども一家をあげて上京した。ジャーナリストを志していた蘇峰は前年出版した『将来の日本』がベストセラーになって見通しがついたためでもあるが、義兄の湯浅治郎とともに民友社を設立して、「国民の友」を創刊することになるのである。

初子は翌二〇年に赤坂の自宅を開放して榎坂幼稚園を経営するが、明治二三年一月二三日に新島襄が亡くなったあと、夫の治郎

は、新島の遺産である同志社の財務主任を二〇年にわたって無報酬でつとめ、更に一〇年を組合教会本部の財務部に奉仕することになるのである。晩年の湯浅は故郷の安中に、柏木義円が四〇年にわたって牧師をつとめている安中教会の新しい会堂を建てることにその情熱を傾けた。どこにいても月に一回は安中の教会に帰り、息子をつれて教会の草とりまでして、片時も教会を忘れなかった治郎は、会堂を自力で完成させて、昭和七年六月七日に亡くなった。ノイローゼ気味でながいあいだ心配をかけた息子の十郎がやっと一人立ちをし、ホーリネス教会の福音使となってブラジルへわたった。初子もどうしてもブラジルへ行かねばならないと用意をしていたが、夫より二年八ヶ月おくれで、昭和一〇年三月一三日に心臓マヒで亡くなった。このために初子は分骨されて、姪の久布白落実に伴われてブラジルの地に埋葬された。先妻の子が四人いる湯浅に嫁ぎ、彼女じしんの子ども四男四女があり、その苦勞は大へんであったろうと思われる。

初子の姉の音羽子もまた、結婚した相手が久保真次郎であったので、のちに組合教会の牧師となった夫について、ハワイへアメリカへと移住して夫の仕事をたすけた。娘の久布白落実が矯風会を背景に廢娼運動を展開できたのも、子どもたちを安心してあずけておける母がいたればこそであった。自分は表面に立たず、母に従い、夫に従い、子どもに従ったキリスト者であった。

矢嶋家の三女である竹崎順子には息子がいなかった。夫の茶堂とともに大のキリスト教嫌いであったが、夫が西南戦争のあとで亡くなってから、熊本市外の高野辺田で孫たちの養育に余念がなかったが、妹たちはつきつきに受洗していった。姪のみや子の夫である海

老名弾正が熊本に赴任してきた翌月の明治二〇年一〇月に、娘の節子とともに宣教師のO・H・ギュリキから洗礼をうけた。六三歳であった。家族のなかでとりのこされた徳富一敬が八六歳で受洗したのと似ている。しかし一敬とちがって、クリスチャンとしての順子の仕事は受洗後はじまるのである。

大宅壮一は肥後の猛婦第一号に矢嶋樗子をあげた。そして姉の竹崎順子、その二人の姪たちである横井みや子と徳富初子、初子の姉の大久保音羽子の娘である久布白落実、徳富蘆花の妻である愛子をえらんだが、大宅は徳富久子を見おとしていたようだ。まずみずからを教育し、さらに子供たちの教育にうちこむばかりか、さいごには夫をも信者にしてしまい、九〇歳の長命で亡くなった久子こそが矢嶋姉妹のリーダーだったように思えるのである。息子について東京に出てもじっとしてはいない。明治二一年には妹のつせ子とはかって、老人花見会を靈南坂教会で設立する。有閑婦人の教会員同志の親睦会ととれなくはないが、久子の思いつきは樗子にたいするいい示唆となり、樗子のよき協力者として婦人矯風会を裏から支える役目をはたしたが、久子のうしろには反動化していく蘇峰がいたことも考えなければならぬ。

(3)熊本バンドの人たちが各地で伝道の成果をあげていたのに、彼らの郷里である熊本に組合教会の伝道がはじまったのはずっとおそい。明治一八年に辻密太郎が新島裏から派遣され、はじめの講義所は西外坪井町にあったという。彼は大江義塾の塾生たちをキリスト教のとりこにしたといわれている。海老名弾正が熊本の地を収束するようになったのは明治二〇年九月であった。

同年六月に徳永規矩らのおこした英語学会は、海老名の熊本赴任

を転機として大きく飛躍し、二一年四月に熊本英学校となるが、同じ年徳富久子の発案で、下村ふさ、有馬まつ、不破つるらによって三人の生徒からはじめられた熊本女学生会は、英学校とおなじく浜田康喜を設立者として認可され、熊本英学校附属女学校となり、翌二二年一月に熊本女学校と改称した。熊本ではじめての女学校がキリスト教主義による女学校であったのは興味のあることである。海老名弾正が英学校と女学校の兼任の初代校長となって、その妻みや子も、宣教師たちも、力をあわせて英学校と女学校をたすけた。生徒たちが教会に入りにするようになって、このころは草葉町教会の黄金時代であったようである。組合教会本部の力の入れようも、O・H・ギュリキ夫妻、ミス・ジュリア・ギュリキ、S・L・ギュリキ夫妻、C・A・クラーク夫妻、ミス・マルサ・クラーク、少しおくれてバセット夫妻、ミス・グリゾルトら宣教師多数が熊本に駐在していたことでもわかるようだ。

大日本帝国憲法の発布された明治二二年には、北米YMCAのルイサー・D・ウイシャードが来日した。東京YMCAは明治一三年に結成されて、小崎弘道が会長となっていたし、同一五年には大阪YMCAが宮川経輝を会長として結成され、二〇年代に入って学生たちの間にキリスト教運動がひろがった。ウイシャードは日本に滞在した九ヶ月間に二百回をこえる伝道集会を開き、海老名弾正の通訳によって行われた熊本での集会は、英学校や第五高等中学校の学生に大きな影響を与えていた。同志社で開かれた第一回夏期学校には、英学校より渡瀬常吉ら六名、第五高等中学校より一名が参加した。翌二三年明治学院で開かれた第二回夏期学校に講師として招かれたのが縁となって、海老名弾正が日本基督教伝道会社々長とし

て熊本を去ったことは痛手であり、第三回夏期学校が阿蘇の垂玉温泉で開かれて機運はもり上ったものの、学生Y M C A 結成は、明治二九年の第五高等学校花陵会の創立をまたなければならぬ。

(4)海老名の後任の蔵原惟郭がスコットランドから帰るまで、柏木義円が同志社に在籍のまま教会と英学校、女学校の面倒をみることにした。柏木は新潟県のお寺の生まれで、安中教会で海老名弾正より受洗した。後半生を新潟裏のひらいた安中教会牧師として、「上毛教界月報」を四〇年にわたって発行し、弾圧にも屈せず非難論をつらぬき通した人である。蔵原惟郭は熊本バンドの一人であり、エジンバラ大学で哲学博士の学位をとった人であった。明治二五年一月一〇日の新校長歓迎会の席上、教師奥村楨次郎の演説のなかに、「我々の眼中には国家なく外人なし……」というけしからぬ言葉があったとして、時の県知事松平正直より奥村の解雇を命ぜられた英学校事件がおこった。松平正直はかつて宮城県知事であったとき、新潟裏に協力してキリスト教主義の宮城英学校（のちの東華学校）を設立したほどの進歩的な人であったのに、六年後にはキリスト教を弾圧する人にかわっていた。明治二二年には大日本帝国憲法が、翌年には近代日本をゆがめるものとなった教育勅語が發布されて、天皇を頂点とする国家体制ができ上っていく時期である。英学校事件のあと八代南部高等小学校、山鹿高等小学校でもキリスト教徒事件がおこり、第二回総選挙の政争がからんでいるとはいえず、キリスト教は国権党のいい攻撃目標であった。知事命令に賛否両論あり、英学校も女学校も教会も二派にわかれて大騒ぎであったことが、福田令寿の『百年史の証言』にしている。

柏木義円はその苦しい立場を東京の植村正久と巖本善治あてにう

ち明け、その手紙はただちに「女学雑誌」第三〇四号に、「熊本英学校一教師の告白」として掲載されたので、日本中の「女学雑誌」の愛読者に読まれたにちがいない。今でこそ評価はできるが、当時の人たちの反応はどうだったのであろうか。「女学雑誌」第三〇七号にのせられた柏木義円の「吾人の心事を開陳して男女両学校諸氏に告別す」では、「一の熊本英学校に死するも天下に百の熊本英学校を起すを得るなり、我校一たび義に由て死するも、更に凜固たる義氣を以て復活し来るの望みあるのみならず、天下幾十の私立学校をして皆我熊本英学校と為すを得るなり……」とその信念ののべているが、知事命令に屈して奥村を解雇した英学校にきびしい批判をのこして、熊本に失望して柏木は同志社へ去った。キリスト教主義の私立学校に国家権力が介入してくる一つの段階として、またキリスト教主義の学校だけでなく、キリスト教が国家権力に屈服していくという大きな意味をもった事件として、内村鑑三不敬事件より深刻な内容を含んでいるものと思われる。奥村楨次郎はその後ハワイへわたって伝道し、ハワイで亡くなった。反対派の人たちは英学校からわかれて東亜学館をおこしたが、経営もむずかしくなり、また英学校と合併して九州私学校となるが、明治一九年に閉校した。明治二〇年前後には仙台の宮城英学校や新潟の北越学館、大阪の泰西学館等の組合教会関係の学校が次つぎに創立されているが、二〇年代後半になって熊本英学校と同じく閉校になっている。外部からの圧力だけでなく、組合教会内部の事情にもよるが、明治八年に創立された神戸女学院、明治一〇年創立の同志社女学校やその翌年創立された梅花女学校、それに熊本女学校も、女子教育の学校はおしつぶされることなく、いまにつづいているのは何故だろうか。

(5)明治二五年に草葉町の現在地に新会堂も落成したのに、教会も英学校と運命をともしたかのように、礼拝に集る者もなくなくなった。英学校事件のあと経営がむずかしくなって、その借財返済のために宣教師の住宅を校長権限で売却したりしたので、宣教師たちは熊本からひきあげてしまった。これは熊本だけの問題ではなく、同志社でも同じようなことがおこっている。アメリカンボードとの関係もあり、組合教会全体の苦悩の時期でもあった。夜は浮浪者の宿泊所になっていた教会をたびたび訪れて祈りを捧げていたのは竹崎順子、山川常子、河田光子らであった。英学校が閉校になったあとに結成された第五高等学校の花陵会の会員たちも年ごとに多くなり、日曜たびに順番に教会をまわって礼拝のあつまりをもったことと、藤原直信が牧師として赴任したことがその後の教会の支えになっている。

熊本女学校は明治三〇年に独立認可をうけて、舎監であった竹崎順子が校長となった。キリスト教信仰と女子教育に余生の一八年を燃焼させて順子は明治三八年三月七日に亡くなった。順子の後任として熊本女学校の校長をひきうけたのは福田令寿であった。熊本英学校で学んでいたときに海老名弾正の影響をうけ、O・H・ギョリキより受洗した。イギリスとドイツで医学を学んで帰国し、京都で開業していたとき同志社女学校で教えた経験もある。熊本女学校長をつとめるかたわら、産婦人科病院を開業し、呉医師会を結成し、明治四一年には熊本市内にある七つのキリスト教婦人会がその運営にあたった無料診療所紫苑会治療所を発足させるなど多彩な活動をした人である。そして大正一二年より昭和二四年までの二六年間を、順子の孫竹崎八十雄が校長をつとめることになる。大正一〇年

に文部省の認定をうけて、各種学校より私立大江高等女学校となったものの経営はくるしく、どうせ廃校になるのなら順子の孫の責任においてという周囲の考えであつたらしい。このさい順子の偉業は葬むるべきで、決して軽率に同志社を去つてはならないという蘆花の忠告があつたにもかかわらず、同志社の宗教主任であつた竹崎八十雄は、祖母の思いの入つた女学校を何とか存続させたいと思つたにちがいない。熊本英学校より同志社に学んだ竹崎は、雄弁家、向う意気の強い人、権威に屈せず所信のためには何もものををかえりみない、公開の席でどんなにくまれ口でも平気で述べ得る度胸をもつた人と評されたほどの人であつたが、昭和二四年の学制の改革を機会に校長を引退し、翌年急逝した。大江高等学校は明治二〇年の熊本女学校の発足から今年九六年目を迎えている。

大正一三年に草葉町教会では女子青年会F G会が結成されて「F G時報」が発行された。第三号のころから「ともしび」と名づけられ、未婚の女性教員が中心となって編集されていた。八九号からは寺沢牧師が一人で発行編集をうけもつたが、昭和一五年の第一一四号で終っている。第二八号のころから「ともしび」紙は組合教会九州部会の機関誌となつて、教会の活動や当時のキリスト教界のこととをするために貴重なものとなつていく。

(二) 聖公会

(1)熊本聖三一教会は一九七九(昭和五四)年に伝道百周年を迎えた。ということは一八七九(明治一二)年に熊本伝道がはじまつたことになる。その年七月一日に安巳橋通二丁目の集会所で、ハーバート・モンドレルから三人の日本人が洗礼をうけた。そのなかの

一人はのちに牧師となった中村亀三郎であり、翌明治一三年の二回目の受洗者には、熊本女学校の創立者の一人である有馬まつがいた。

一八五九(安政六)年、英国聖公会のC・M・ウィリアムスは日本派遣の宣教師として、伝道中であつた中国より禁教下の長崎に上陸し、崇福寺を根拠地とした。三〇歳のときである。中国で苦勞をともにし、日本派遣もともにきまつたJ・リギンスは病氣のため、ウィリアムスより早く長崎にきていたが、一〇ヶ月で帰国した。翌年来日した宣教医師シュミットも過勞のため帰国し、ウィリアムスは一人で長崎にとどまることになった。宣教師たちが年若くして来日したのも、心身ともにタフでなければつとまることではなかつたからと思われる。リギンスが帰国したあと、ウィリアムスのただ一人の友は、ウィリアムスより五ヶ月おくれて長崎にきたフルベッキであつた。フルベッキはアメリカ改革派の宣教師であつたが、子どもたちはウィリアムスより洗礼をうけている。やがて伝道の機会がくくすることを信じながら、伝道用のパンフレットをつくらしたりしてすぐウィリアムスの大きなよろこびは、慶応二年の肥後藩士荏村助右衛門のひそかな受洗であつた。バラに日本語をおしえていた矢野元隆について、荏村は日本で二番目のプロテスタントの受洗者であつた。文久三年ころに長崎へ英語の勉強にいった肥後藩士の監督をしているうちに、キリスト教をした。若いころ松崎謙堂より漢学を学び、安井息軒は同門の兄弟子にあたる。荏村はのちに官吏になり、三条実美の秘書をしたりしていたが、日本の伝道主教として東京に移つたウィリアムスには再会せず、信仰もさめてしまったのではないかといわれている。晩年は熊本市ですごし、明治三八年に八

二歳で亡くなつた。墓は坪井の真浄寺にある。

(2)明治六年に英国聖公会は日本に七名の宣教師をおくつてきた。

モリーシヤス島とマダガスカル島で一二年間の伝道経験をもつハーバート・モンドレルは、明治八年に長崎に赴任した。二年あと、英国領事館敷地内にアンデル神学校を創立するが、明治一七年に設立された大阪聖三一神学校に合併した。テニソンの従姉妹であつたエリザ・グッドウォールは夫の死後、英国聖公会最初の婦人宣教師として明治九年に長崎に上陸した。一二年に女子塾を開き、一〇人ほどの塾生とともに生活した。十人女学校ともいわれ、のちに長崎女学校となつたが、明治三九年に大阪のプール女学校に合併した。

明治一五年から四年間熊本に牧師として在任した洪恒太郎は、過去をふりかえり最も伝道の困難だつたのは熊本であるが、収穫の多かつたのも熊本であつたと述懐している。熊本はそんな土地だったのである。

明治二〇年には英国聖公会からピカステス司教が派遣されてきて、監督系英米三つの伝道会社を合併して日本聖公会が設立された。そして地方会の中心として東京、熊本、大阪、函館の四都市がえらばれた。その年に熊本では紺屋今町に新しい教会が建てられ、英国人宣教師ジョン・B・ブランドラムが責任者となつて、聖十字教会と名づけられた。九州ではじめての日本人の手によって建てられた教会であつた。

(3)明治二〇年春に第五高等中学校が開校され、ミス・ブランドラムは英語教師となつて勤務した。お雇外人たちは高給であつたが、宣教師は無報酬であり、英語をおしえるかたわらキリスト教の伝道ができることは、宣教師にとって魅力のあることであつたにちがひ

ない。当時熊本にはキリスト教主義の熊本英学校や熊本女学校があったが、組合教会のO・H・ギュリキをはじめ数人の宣教師が滞在しており、九州の最高学府である熊本市の第五高等中学校学生たちへの伝道のために派遣されたハンナ・リデルは、明治二三年の二月熊本に到着した。ロンドンで貴族の家に生まれたリデルが三五歳のときである。すぐに学生を相手に伝道をはじめたが、四月三日に本妙寺の桜の花の下で見たライ患者は、リデルの生涯をかえてしまった。昭和七年二月三日に亡くなるまでの四二年間を、日本の救ライ事業に捧げることになるのである。文明国ではそのころライ病は忘れかけられている病気であったが、日本では面倒をみる者もなく、ライ患者は野放しの状態であった。日本のライ患者救済のための援助を英国伝道会社に拒否されたリデルは、英国にあるリデルじしんの財産を処分して、竜田山のふもと、第五高等学校の東側に四〇〇〇坪の土地を買い、聖公会エビントン主教司式のもとに回春病院が開院したのは明治二八年一月である。収容した患者は三八名であった。

カトリックのコール神父によって熊本市外の琵琶崎に待労院が開設されたのは三年後のことである。プロテスタントとカトリックのちがいはあっても、リデルとコール神父が、同じ目的をもってお互いに語りあうことはなかったであろうか。そのような資料は何一つのことっていない。コール神父はリデルより早く本妙寺のライ患者のこととはしっていたし、静岡ではすでにテストウイド神父によって復生病院が設立されていた。リデルが女の身で牧崎に臨時教護所を設けて患者の治療にあたっていた様子を見て、ときには見舞もしたのではないかと九〇年の昔に想像をたくましくするばかりである。

リデルの政治力はすぐれていた。精力的に旅行をし、その育ちのよさからくる物おじしない性格で、病人のことなど考えようともしない、富国強兵だけの政治家や財界人と逢い、声を大きくしてライ撲滅につながる救ライを叫びつづけたのである。新島襄が寄附集めでその精力をすり減らしていったように、リデルの回春病院運営のための資金調達も想像に絶するものがあつたのではなからうかと今ふりかえて思うばかりである。リデルの最初の仕事である五高生への伝道はそのあと実をむすび、花菱会員のなかから宮崎松記のような、キリスト教だけでなく、その生涯を救ライ事業に捧げた人を出ていったのである。

リデルの仕事は姪のエダ・ライトにひきつがれた。明治二九年に二七歳で来日して伝道事業にたずさわり、伯母の仕事をたずけるために来熊したのは大正一二年であった。昭和七年にリデルが亡くなったあと、そのかほそい身体で回春病院をささえてきたが、昭和一六年のリデルの命日の二月三日に、回春病院は四七年の歴史を閉じた。戦争という異常な状態であったとはいえ、熊本はライトにスパイの疑いをかけて、石を投げて追いはらうようにしてオーストラリアに送り出してしまった。ライトは七一歳の老令であった。母国イギリスにはもう帰るところもなく、前年帰国した聖公会の宣教師ミス・フリースをたよったのであった。ミス・フリースはリデルのよう目立つ仕事はしなかったが、明治三四年に熊本にきて以来、宣教師ペインターとともに阿蘇伝道に力をいれ、多くの業績をのこした人である。戦後ライトは死に場所を求めようにして、再び熊本に帰ってきて二年目の昭和二五年二月二六日に八〇歳で亡くなった。その晩年はいたましい。カトリックの待労病院がいまでも立派

に運営されているのにくらべると、回春病院は個人の仕事であっただけに、リデルとライトの仕事には宿命的なものがあつたように思える。

回春病院がその幕をおろして四〇年たった。竜田山麓の泰勝寺にガラシア夫人の墓があることははしっていても、その通り道に回春病院があつたことをしる人は年ごとにへつてきている。イギリスの女宣教師が独力で病院を開き、救ライにその生涯を捧げたことを語りついでいくことで、リデルとライトに対するせめてもの感謝としなければならぬ。

(4)明治二九年五月二三日、七人の学生によって第五高等学校 Y M C A である花陵会が創立されたが、リデルにかわつて学生伝道をしたのはブランドラムであつた。明治三年に病気で熊本を去るまで、ブランドラムは花陵会員の指導者となり相談相手となつて、花陵会史にその名をとどめている。

ミス・フリースやペインターにより阿蘇伝道がはじめられて、昭和五年には聖テモテ伝道所の聖堂が宮地に建てられ、幼稚園も併設された。昭和七年には三浦清一が牧師として熊本に赴任した。三浦は明治二八年五月二〇日、上益城郡甲佐町の生まれである。福岡神学校で学び、聞く人の心をひきつけるその弁舌のために、リー主教は三浦に「教区巡回伝道者」という前例のない任務を与えたほどである。聖使女学校を出て各地で婦人伝道師として働いていた石川光子(啄木の妹)と、大正一二年に結婚する。昭和一年に三浦の指導で「阿蘇兄弟団」が宮地で結成され、三人の青年が定住して、農業労働と信仰の実践集団としてその成果をあげていたが、昭和一五年の八月、反対派の青年たちによって、聖テモテ伝道所も宣教師住

宅も兄弟団も破壊され、井戸水もつかえなくなつてしまつた。太平洋戦争のおこる一年前のことである。これを機会に英国人宣教師たちすべては自発的に帰国することになり、日本人キリスト者たちの受難も敗戦までつづくのである。聖公会は英米との関係が深いとみられて監視の眼もきびしかった。ライトの秘書をしていた飛松甚吾も豊福牧師とともに、スパイ容疑で拘留された。家族の人たちも言うに言われぬ辛い思いをされたにちがいない。三浦清一は昭和一六年の一二月、台湾伝道から帰るのをまつて逮捕され、六ヶ月の拘留生活を送つた。出獄後は九州には身のおき所がなく、賀川豊彦のもとに身をよせて、賀川の経営する精薄施設である神戸愛隣館長となつた。戦後は社会党员として兵庫県議員を一〇年つとめ、キリスト教と社会事業のために精力的な働きをして、昭和三七年七月一〇日に亡くなつた。愛隣館長は妻の光子にひきつがれ、六年後の一〇月二一日に光子が亡くなつたあとは、息子の賜郎氏にうけつがれていく。

(三) メソジスト教会

(1)メソジスト教会の日本宣教は明治六年にはじまる。この年アメリカ・メソジスト監督教会から派遣された宣教師たちは、横浜に R・S・マクレイトと J・H・コレル、東京に J・ソーパー、函館に M・C・ハリス、長崎に J・C・デピソンが到着して布教することになった。聖公会のパンサイドと改革派のスタウトがすでに伝道をはじめていた長崎の出島二番に本部をおいて、デピソンは活動をはじめめるが、教会を建てたのは明治九年であつた。そして教育事業にたずさわる宣教師の派遣を要請し、婦人外国伝道協会から教育活

動にはエリザベス・ラッセルが、福音活動にはジョン・M・ギールが派遣されて、長崎に到着したのは明治二年一月のことである。ラッセルは四三歳、ギールは三三歳であった。一週間後に「私を伝道者として教育してください」と申し出てきた官梅能をたった一人の生徒として、教師二人の女学校が発足する。のちの活水女学校である。鎖国以来、日本でただ一つの開かれた港であった長崎の女たちは、外国の文化にたいして常に新しい女であったといえるようだ。たった一人の生徒官梅能は二三歳で、寡婦になって居り、能の娘のマサエはのちにラッセルの養女となって、メイ・ラッセルと姓もかわり、アメリカで教育をうけて帰国し、活水のために働いている。明治一三年にはC・S・ロングが外国伝道局より派遣されて、翌一四年一〇月東山手六番にカブリー英語学校を創立する。のちの鎮西学院である。

横浜では改革派のフェリス女学校が明治三年に、メソジストの海岸女学校（のちの青山女学校）が明治七年東京に、聖公会の立教女学校が明治一〇年に創立されていて、長崎はそれにすこしおくれるが、熊本のミッション・スクールは長崎より二〇年おくれて、カトリックの玫瑰女学校が明治三三年に創立されるのである。

(2)メソジスト教会の熊本伝道は明治一六年の一二月、鎮西学院の創立者C・S・ロングと飛鳥賢次郎によってはじめられている。飛鳥賢次郎は徳富蘆花の『竹崎順子』によって私たちにもなじみの名前である。通町から安巳橋通りへ坪井建町へと講義所はうつつたが、明治二六年一二月には安巳橋通りに会堂が新築された。明治二二年八月には活水女学校神学部第一回卒業生である大島サキが婦人伝道師として着任して、大正六年一月二八日に亡くなるまで二

八年にわたって、教会の母としたわれた。また第五高等中学校教師として来熊したカナダ・メソジスト教会のE・克蘭ミーも初期の教会の力であった。

(3)熊本英学校で学んだ田添鉄二は明治二五年に牧師栗村左衛八より受洗する。しばらくメソジスト教会の書記などしていたが、翌年長崎の鎮西学館に入学した。これは熊本英学校事件のあと英学校が分裂した時期にあたるので、キリスト教を学ぶには長崎でなければいけないと思ったのではないだろうか。明治三年に神学科を卒業してシカゴ大学神学部に留学し、シカゴ大学では神学より社会学を学んで二年後に帰国した。帰国後は教会に行くことはなかったというのであるが、明治五年に七歳年上の中尾ユキエと結婚する。ユキエは長崎県の生まれで活水女学校に学び、明治二二年に校長のラッセルが休暇で帰米したときにもなわかれて、オハイオ州ウェスレアン大学で美術を専攻し、帰国して明治三二年まで六年間、新設された美術部で木彫の指導をした。今でこそ木彫は流行しているが、『活水学院百年史』にのせられた写真でみると、九〇年前にこれほどの精巧な木彫をつくった活水の教育におどろかされる。ユキエが母校で教鞭をとっていたころ田添鉄二はアメリカに留学していたのであるが、知りあったのは留学前であったと思われる。一年足らずつとめた鎮西日報社をやめて鉄二・ユキエ夫妻は上京する。明治四一年三月一九日に田添が亡くなるまで、結婚生活はわずか六年である。田添の社会主義者への歩みは、キリスト教によって培われ、アメリカ留学によって方向づけられたものであった。三九歳で寡婦になったユキエはしばらく社会主義運動をつづけたが、就職した日本女子大学にも長くおられず、明治四二年に中国にわたり、四

川省成都の師範学校につとめ、日本に帰って昭和一九年一月七六歳で亡くなった。田添の活動もユキエの支えがあつてのことだったと思われる。田添とユキエの結婚のころ、田添の妹テルは活水女学校で学んでいた。音楽師範科を卒業して母校にしばらく勤め、服部牧師と結婚した。夫が若くして亡くなったあと田添に復籍して、熊本 の県立第一高等女学校や尚絅高等女学校に勤務し、晩年には活水女学校の舎監を六年ほどつとめ、昭和五年一月七日に八九歳で亡くなっている。テルのほかは剣道の達人であつた父太郎彦、太郎彦の後妻ふみ、鉄二の妹石坂カジュも受洗しているが、田添家の受洗は大島サキの影響であつたと、活水学院の吉村先生より教えていただいた。

(4)明治二六年に島原地震があつたとき、熊本県には大きな津波がおこり、沢山の子どもが親を亡くした。ラッセルは孤児となつた女兒一五名をひきとつて、大江町九品寺に孤児院を開いた。現在の白川教会に隣接した土地で白水女園と名づけられていた。ラッセルはその経営に力をそそぎ、大島サキらの協力もあつたが、熊本市での借家は家賃も高く、活水の卒業生より土地の寄贈があつたので、明治三年に福岡市外古賀村に引っこした。熊本でのラッセルの孤児院が大村活水女園のおこりであつた。幼いとき母を亡くした田添テルは父の再婚もあつて、白水女園で読み書きを学び、明治二九年に活水女学校の小学科に入学することになる。

大正一三年に当時としては珍しい鉄筋コンクリート建の王業幼稚園が創立されたが、これは前年より熊本市九品寺の婦人宣教館の一室で、近所の幼児一二名をあつめてはじめた保育事業が実を結んだものである。熊本ではじめてのプロテスタントの幼稚園であつた。

名付親は福田令寿であり、初代園長はマーベル・リーであつた。代々女宣教師が園長であつたが、昭和一六年からは市川ヒサさんが園長にかわり、ミッションからの援助もうち切られて、その運営は大変な苦勞であつたとき。

エリザベス・キルバンは一八九九(明治二二)年アメリカのフィラデルフィア生まれ、大正八年三〇歳のとき宣教師として来日し、翌九年から五年間熊本市に在任した。大正一二年に小作争議中の八代の郡築を賀川豊彦とともに訪れたが、そのあまりに気の毒な状態を見るに見かねて、翌年一月二〇日に毛糸やネルや木綿の布などの材料を自動車に満載して、郡築の女たちを見舞つた。一週間とまりこみで午前中は編物、午後は裁縫をおしえて大変感謝をされたという。その後キルバンは仙台、札幌、函館、東京などへ赴任し、第二次世界大戦ではとんどの宣教師が日本からひきあげたが、彼女は他の三名の女宣教師とともに、アメリカに帰ることを承知せず、四年間の抑留生活をつづけた。戦争がおわるとすぐキルバンは熊本を訪れた。三年坂の教会も戦災にあい、市川姉妹や近所の人たちの協力で焼けのこつた幼稚園に教会も牧師一家も同居しているのを見て、すぐ進駐軍にかけあつてMPにメリケン粉を届けさせた。日曜ごとに教会でもだんご汁がつくられ、園児だけでなく教会員たちも空腹をみたすことができたということである。大変な親日家であつたが、抑留生活の無理がたたつて昭和二年一月二二日に五七歳で亡くなった。郡築争議のときのキルバンの勇気のある行動を、教会の昔をしっている人たちは覚えて居られたが、教会の記録にもキルバンの伝記『翼なき天使』にも記されていない。困っている人たちをたすけるのはあたりまえのことであつて、特記すべきこと

はないのかもしれないが、郡築争議の記録がキルバンを書きとめていたのである。

(四) 日本基督教会

(1) 日本基督公会は、改革派のジェームズ・H・バラに学んだ英学塾の学生九名と、別の信者二名の青年たちによって、明治五年に設立された。横浜バンドといわれている人たちが、井深梶之助、押川正義、本田庸一、植村正久らがその中心となっている。明治六年に創立された東京基督公会とともに、アメリカの長老派と改革派の宣教師たちの尽力によるものであった。外国の教派によらない無教派主義の日本人の独立教会であったが、明治六年になるとメソジストやバプテスタなど、教派主義のつよい教会が入ってきて公会主義もむずかしくなった。米国伝道会社の宣教師たちの協力によって、明治七年には摂津第一公会（のちの神戸教会）、梅本町公会（のちの大坂教会）が創立されて、合同問題がおこったがうまくいかず、明治一〇年になって長老派、改革派などが合同して日本基督一致教会が組織された。そして明治一九年になり組合教会との合同問題が再燃するが、足かけ五年かけて交渉を重ねたが失敗におわり、一致教会は明治二三年に日本基督教会となった。

(2) 熊本伝道は明治二六年八月二〇日に平山武知によって坪井鳥町ではじめられた。「組合教会の地を侵すべからず」という理由で熊本伝道開始はおくれたのであるが、翌年には日清戦争がはじまり、礼拝の出席者も四、五人になってしまったという。明治三〇年には三宅俊輔が鹿児島より転会し、ハンナ・リデルの回春病院々長をつとめながら、大正一五年に亡くなるまで長老として教会を支えた。

明治三九年には熊本市東外坪井町に会堂と牧師館が新築され、翌四〇年には伝道局の補助を謝絶して自給独立の教会となり、熊本日本基督教会と称するようになった。教会の性質上外人宣教師はいない。選挙によって選ばれた長老たちがそれぞれに牧師ほどの重みをもっており、学者の多い教会といわれていた。

どこの教会でもそうであるが、第五高等学校の花陵会をはじめ、熊本高等工業学校の溪水会、熊本薬学専門学校のヨルダン会の学生たちが果した役割は大きい。前熊本市長山隈康の夫人芳子は、経済的に楽でなかった学生や社会に出たばかりの若者たちに目をかけて、家を借りて数人を住まわせていた。教会の伝道所の看板をかけて、子どもたちのための日曜学校を開かせていたので、子どもたちや学生たちの集会所となり、この学生たちのなかから牧師も三人生まれている。山隈芳子は昭和四年から二九年まで教会の長老であった。昭和四年から九年間牧師をつとめた松尾喜代司氏は五高花陵会の出身であるが、五・一五事件を批判したとか、伝道説教で軍人を攻撃したとかいわれて、数年のあいだ警察につけまわされた。先輩の松尾牧師をしたって花陵会員の出入りが多く、花陵会館にもまた学生があふれていた。元熊本県知事の寺本広作氏や植物学者の塚本洋太郎氏など、それぞれの居住地の教会の長老となっておられるし、花陵会の人たちは五高を卒業するとともにキリスト教も卒業してしまうという批判は、この熊本教会に関するかぎりにはあたらないうちに思える。

(3) 昭和二四年の春、荒尾市の現在の孫文記念館の一室で、日本基督教団熊本坪井教会の荒尾伝道所が設立され、二六年には有明海を見渡す増永の小高い丘の上に荒尾教会が新築された。これは宮崎民

藏の妻美以と長女の貞さんの努力によってできたものであった。こんどの戦争のときに東京から疎開してきて、荒尾市の東方の龍門に住んでいた貞さん母子は、敗戦のあと荒尾市の生家にかえった。貞さんは東京の美術教会の浅野牧師が九州伝道の途中に荒尾市にたち寄りられたのを機会に、熊本市の坪井教会の松本牧師にもきてもらって、自宅で一八人の最初の集会をひらいた。それから月に一回、あるときは二回と牧師に足を運んでもらって家庭集会をつづけた。荒尾高等学校に英語教師としてつとめるかたわら、忙しいときは試験の採点がすんでから、夜中までかかって翌日の集会の準備をしたりなどした貞さんにとっては、家庭集会はいのちであった。教会を建てるときは、全国にいる教え子にも寄附をよびかけ、本当にそのときは大変でしたと、貞さんと一しょに暮らしていた白谷マツエさんは語って下さった。荒尾教会は貞さん母子の遺産だったのである。

昭和二八年九月一日に貞さんは母の美以とともに上京する。戦前つとめていた恵泉女学園に復職し、園内に美以と二人でくらしした。七〇歳で退職し、個人教授などしておられたようであるが、美以が九九歳で亡くなった翌年の昭和四八年に、社会福祉法人新生会経営の老人ホーム春光園にはいった。かつての英語教師のきりっとした面影があり、一日の大半を読書と手紙をかくことですがごとくしておられたようであるが、現在は新生会の特別養護老人ホームで寝たきりになっておられる。この貞さんは明治二六年七月一日生まれで、熊本県立高等女学校から津田英学塾に進み、そのころ受洗されたようである。徳富蘇峰に小崎弘道を紹介された叔父の寅藏（宮崎滔大）と弥藏は、熱心に教会に通い明治二〇年に受洗した。祖母のサキも伯母の留茂も信仰をもっていたと貞さんは伝えている。民藏は若い

ころ寅藏や弥藏とよく宗教哲学のことで議論をし、取っ組みあいでしたというが、キリスト教をどんな眼でみていたかはわからない。

昭和一六年六月、カトリック、ハリストス正教会、聖公会以外の教会は合同して、日本基督教団として発足した。明治時代にできなかった組合教会との合同が、このような形で実現したのはまさに政治の力であるが、このあと四〇年以上もそのままつづいている。

(五) バプテスト教会

(1)ペリー艦隊の水夫として一八五三(嘉永十)年に日本に上陸して国内を視察したジョンナサン・ゴープルは、七年後に米国自由バプテスト伝道協会の宣教師として、夫人とともに来日した。漂流民の仙太郎を教育してつれてきたが、ゴープルの期待にこたえることはできなかったという。ゴープルがくるしい自給伝道生活のなかで、日本ではじめての『摩太福音書』を明治四年に横浜で出版した業績は大きい。バプテストの本格的な伝道がはじまったのは、明治六年に米国北部バプテスト伝道会社によって、ネーサン・ブラウンが派遣されてからである。翌年にはブラウンの息子が印刷機械をもって来日し、出版事業をはじめた。ブラウンは来日したとき六六歳であったが、すぐ日本語の勉強にとりかかり、明治二年八月新約聖書の全訳を完成した。バプテスト訳にいわれている。そのほかに旧約聖書の一部分、讚美歌などを翻訳し、明治一九年一月一日に疲労のため亡くなった。

(2)ジョージア州アトランタ第一バプテスト教会のW・H・クラークは明治三二年一月長崎に上陸し、福岡のマッコラムのもとで日

本語を勉強した。マッコラムは明治二年来日した米国南部バプテスト教会の宣教師である。クラークはおくれて来日した婚約者ルシール・ダニエルと結婚して、一二月下旬に熊本に赴任したが、一年前より伝道をはじめていた後藤六雄とともに、熊本教会の基礎をつくった。明治三五年には熊本浸礼教会が組織され、同三八年には南坪井に会堂が建てられたが、日本バプテスト連盟の教会としては一番早いものである。クラークじしんが阿蘇の小国に行って聖壇の柱などをえらんだといわれ、戦災にもあわず、つい最近まで熊本市北警察署の前にあった教会である。

クラーク夫人は日本にバプテストの女子教育機関が必要だということ、誰よりも早く主張していた人で、宣教師の集會や伝道會社、あるいは南バプテスト大会にと、機會あるごとに熱心に訴えた。当時の宣教師のなかには教育事業に無関心な人たちも多く、反対論もあってその苦勞は並大抵のことではなかった。夫妻の腹食を忘れての運動によって、ジョージア州の多くのバプテスト教会の婦人會から、女学校建設のための最初の寄附八万円がおくられてきた。熊本市の京町台に建てたいというクラーク夫妻の希望であり、敷地を何度も見に行ったりして、その夢も大きくふくらんでいた矢先、反対派の宣教師たちから敷地変更論がおこり、福岡にという説から小倉へと決定されてしまった。それと同時にクラーク夫妻は二〇年間の熊本伝道から東京へ転任になってしまった。女学校設立にかけたクラーク夫妻の情熱と苦勞をふみにじったこの決定は、当時バプテスト教会内でも論議の対象となっていたようで、五高花陵會の學生がバプテストは問題が多いから、他の教会で受洗したのもこのころのことであろう。もしこの女学校が熊本に設立されたら、熊

本女学校と合併するというような話も出ていたと福田令寿は語っている。

福岡の西南学院は米国南部バプテスト教会の宣教師C・K・ドージャーによって、大正五年に創立され、二年後にはバプテスト系の教会が合同して日本バプテスト教会が結成される。そして西南女学院がJ・H・ロウによって設立されたのは大正一年のことであった。クラーク夫人は昭和八年に病気で帰米の途中、明日はサンフランシスコに到着するという五月三日に亡くなった。

(3) 五高の花陵會出身で、日本YMCA育ての親である斎藤惣一は山口県の生まれであるが、父が門司周辺の砲台建設の仕事をしていたころ、父の友人の影響をうけてミス・カミングのバイブルクラスに通う。五高教授として在任中は花陵會の指導にあたり、母も妻も妹も一家をあげて教会の支えとなった。クラーク夫人は熊本にバプテストの女学校ができたなら、斎藤に女学校の仕事をさせたいという希望をもっていたようである。

熊本英学校の創立者である徳永規矩・うた夫妻の長女である福永津義は、明治二三年八月五日に熊本県芦北郡津奈木町で生まれた。規矩は徳富一敬の末弟である昌龍の長男であるが、昌龍夫妻が早く亡くなったために、一敬の母のもとで育ったので、蘇峰とは兄弟同様の間柄であった。慶応義塾に在学中ナックスより受洗し、『逆境の恩寵』の著者として有名である。母うたは同志社女学校で学んだ人であり、のちに熊本女学校の舎監をつとめた。クリスチャンであった両親の教育をうけ、活水女学校の幼稚園師範科で創立者エリザベス・ラッセルの影響をうけた。福井のメソジスト教会附属の栄冠幼稚園の主任保母であったとき、牧師の福永盾雄と結婚した。結婚後

朝鮮に渡り、ホルストン女学校に勤務したが、大正一五年に夫とともに神戸に早緑幼稚園を創立する。昭和一五年にはドージャー夫人が開設した福岡の西南保母学院に招かれた。バプテスト教会の学校で一校の責任を負う立場になって、洗礼をうけなおして、メソジストからバプテストにかわるほどけじめをつけた人であった。西南保母学院が福岡保育専攻学校と改称し、のちに西南学院大学に合併するまで、その生涯をキリスト教主義の保育ひとすじに捧げた立派なキリスト者であった。ミス・ギールが創立した福岡女学院に、はじめの日本人の校長として二五年間つとめた徳永ヨシは津義の妹にあたる。西南女学院短期大学の高橋さやかさんは津義の長女であり、児童文学者として著名な方である。

高群逸枝の『火の国の女の日記』によると、高群が熊本女学校に在学中に呼びとめられて注意をうけた。「あなたは天才ではない。天才と思ってはならない。あなたの才能はあなたが書物をたくさん読んでいるからであって、思いがってはいけない」とさとしたという「徳永歌子先生」が徳永うたである。

(六) ルーテル教会

(1) アメリカ南部一致ルーテル教会が外国伝道局を創設して、日本伝道をきめたのは一八八八(明治二一)年のことであった。三年後に日本伝道の先駆者としてえらばれたのは、まだ二三歳の青年J・A・B・シューラーであった。彼は一躍南部一致教会の話題となつて、その写真はとぶように売れたという。彼がゲーリック号でサンフランシスコを出国するときは、数百の教会の鐘が一せいに鳴らされた、『日本福音ルーテル教会史』はその劇的な出航の様子を伝

えている。

シューラーは明治二五年二月二五日に日本の土を踏んだ。そして新栄教会のタムソンから山内量平を紹介される。山内は植村正久の義兄にあたるが、当時日本基督深川教会の長老であった植村正久が経営する「日本評論」と「福音新報」の出版をひきうけていた。そのため本屋と印刷所をひらいていたが、資金ぐりが思わしくなかったので外国人に日本語を教えていて、タムソンとの関係もその日本語の教師としてであった。シューラーの日本語の教師となった山内量平は、のちにルーテル教会の初代牧師となり、教会創設の功労者となった人である。

明治二〇年代の日本のキリスト教は国家主義との対決があり、また新神学の影響によって大きな動揺のあった時代に、他の教会にたちおかれて伝道を開始したルーテル教会は、都会よりもむしろ他派の教会のえらびのこした田舎の方に伝道をしたという希望をもっていた。シューラーは佐賀で英語教師をしていた友人のブラッドベリーの後任に推薦されたので、佐賀を本拠として、あとから到着したR・B・ピリーと山内量平夫妻の四人で、日本福音ルーテル教会の最初のささやかな礼拝を行った。明治二六年四月二日のことである。最初の受洗者は熊本県小天の志水徳松であったといわれている。山内量平と同じ和歌山県出身で明治学院神学部に進んだ鈴木直丸が、山内量平の娘あやと結婚して山内直丸となり、佐賀にきて伝道をたすけることになった。そして明治三一年の秋にはデンマーク・ルーテル教会のJ・M・ウインテルと、健康を害して帰国したシューラーにかわって、C・L・ブラウンが着任した。この人こそ熊本教会の建設と九州学院創立の業績をのこした人である。

熊本にルーテル教会の伝道がはじまったのは明治三十一年一〇月二日である。山内直丸夫妻と、その当時は五高の学生で花壇会員であった副島松一の三人で、熊本での最初の礼拝が行われた。明治三十一年一二月にはブラウンが家族と共に定住し、水道町の現在地に教会が新築されたのは明治三十八年六月であった。会堂にかかっていた大柱時計は、熊本にいたロシア人捕虜のうち三十数人のルーテル教会員が記念に寄贈していった時計だったそうであるが、戦災で焼けてしまった。日露戦争のとき熊本教会の婦人会では、出征の令状をうけた教会員とその家族の人たちへ毛糸の靴下を贈呈するために、熱心に編物をしたという。また帰還傷病兵士慰安のための各教会連合の大音楽会を開催し、熊本女学校生徒の合唱、ブラウンのギター、ブラウン夫人の英詩独吟、メソジスト教会のデビソンのヴァイオリン独奏などの出演があったという記録がある。このころルーテル教会の主力は佐賀県から熊本県に移っていた。

(2)明治三十八年に神学校を含む教育機関を日本に建設することが米国ルーテル教会で決議され、四一年九月に熊本高等予備校が当時の熊本市外大江村の(旧)向栄社跡に設立された。三十八年にピリーにかわって着任したA・J・スタイワルトが校長となり、五高教授らが講師となって、五九名の入学者に毎日四時間の授業が行われたが、翌年六月急に閉校になった。そしてその年の九月二十七日に同じくスタイワルトが校長となって、新屋敷のスタイワルト宅を仮校舎として、教職者養成のためのルーテル神学校が開校された。現在の日本ルーテル神学大学の前身である。

九州学院は明治四十三年一月二十九日に認可をうけ、翌年四月一五日にまた校舎も完成していないなかで授業がはじめられたが、創立当

時の教員に田添鉄二の父太郎彦の名をみる事ができる。院長にはそれまで五高の英語科主任教授であった遠山参良が就任し、ブラウンは主事の肩書きであった。ブラウンが来日したのは二四歳のときであったが、今や日本での布教経験ゆたかな三七歳の宣教師として押しも押されぬ人であった。遠山参良は八代郡鏡町の出身で、慶応二年生まれであるからブラウンより八歳年長である。熊本洋学校で一年学び、同志社、カブリー英語学校(鎮西学院の前身)を卒業し、明治二五年にアメリカのオハイオ州ウェスレアン大学に留学、帰国後は母校の鎮西学館と活水女学校の教師をつとめ、夏目漱石のあとをうけて五高英語科主任教授となった。遠山とブラウンの運命的な出逢いも、遠山が五高の夏目漱石に挨拶に行つて長崎に戻る途中の汽車の中であった。ちなみに遠山はメソジストであるが、九州学院に勤めてもルーテルに転会はしていない。

九州学院の一回生二二人のうち、大正五年に卒業したのは三分の一の四二人である。「ブラウンは授業熱心で、一所懸命英語を教えたが、ブラウンが力を入れれば入れるほど、外国語に耳馴れない生徒たちはとまどった。とくにWの発音なんか生徒たちにデブリューと聞えて、そのつど『デブリュー、デブリュー』と調子をとって囃子たてた」と、昨年発行された『九州学院七十年史』にある。私の父もそのなかの一人であった。ブラウンは手塩にかけた第一回卒業生の晴れやかな顔を見ることがもなく、大正五年の二月アメリカへ去る。そして大正一〇年の四月アフリカへわたるが、その年の二月五日に黄熱病で亡くなった。

九州学院が開校されてから、ルーテル神学校は九州学院内にうつり、九州学院神学部とよばれるようになったが、文部省認可は大正

五年である。教会の本部が熊本にある以上、神学部、九州学院の生徒教育のために来熊する宣教師たちの、キリスト教を通じてなされる人間教育にこたえる素質を生徒たちは充分にもっている。創立直後の宗教界、教育界で働いた多くの人たちが果立っている。創立直後のはやかな時代が去って、神学部は次第に生徒もへり、大正一一年から二年ほどはゆきづまりの状態であった。熊本での一六年の歴史を閉じて東京へ移り、J・P・ネルセンを校長として日本ルーテル神学専門学校が大正一四年九月一五日から開校された。これはルーテル教会の中心勢力が東京へ移ったことであった。

(3) ルーテル教会のはじめの女宣教師として大正三年に来日したマーサ・B・エカードを校長として、マリオン・E・パッツを協力者として、熊本市ではじめてのプロテスタントの女子ミッション・スクールである九州女学院が開校されたのは、大正一五年四月のことであった。第一回の生徒募集の入学案内には、「基督教ノ主義ニ基キ女子ニ須要ナル高等普通教育ヲ施シ堅実善良ナル婦人ヲ養成スルヲ目的トス」とあるのが、翌年の第二回生募集のときには、「教育勅語ノ本旨ヲ遵奉シ基督教ノ主義ニ基キ……」と変っているのを見てもわかるように、創立のあとのキリスト教の主義にもとづく教育には次つぎに制限が加えられ、昭和三年の天皇の即位式には県知事訓令によって、ステンドグラスのある講堂に天皇皇后の写真がかざられ、讚美歌のかわりに君が代がうたわれた。女学院の第一回卒業式は昭和六年三月に行われて五二名が卒業した。一回と二回は卒業記念礼拝として行われたが、昭和八年の第三回は卒業式となり、讚美歌、聖書朗読祈禱のつぎに国歌斉唱、勅語奉読が行われるようになった。だがその反面では、エカードとパッツの授業に対す

る態度はきびしく、他の女学校にない聖書の時間が週二時間あり、それで落第点をつけられる生徒がいた。落第は恥ずかしいことではなく、駄目ならもう一年やり直すというアメリカ式の考え方と、落第は恥ずかしいことで、お情け点をもらっても進級しなければという日本式の考え方とは落差が大きく、五回、六回となるにつれて卒業生はしだいに少くなってきた。毎年補助金を送ってくる伝道局にたいして申し訳ないとエカードは随分気もつかったようである。昭和一六年七月四日、プロテスタントの信仰にもとづいたアメリカの独立宣言の日を断固たる態度で祝い、生徒にアメリカの国歌をうたわせたエカードは、その年の九月二三日にパッツとともに帰国した。そして昭和一八年四月より女学院は清水高等女学校と名称をかえ、九州女学院は翌一九年三月三一日で閉校になるが、戦争によってエカードもいなくなり、ミッション・スクールでもなくなった女学院は、普通の私立女学校とかわることはなかった。九州女学院の名称とキリスト教にもとづく教育が復活したのは、昭和二年になつてからであり、戦後の第一船で帰ってきたエカードを迎えることができた。昭和三〇年に停年のために帰国したエカードは一四年後の五月三〇日に、故郷のプロントビルで亡くなっている。

(4) ルーテル教会はえらばれた者たちへの教育事業に力を入れる一方、社会事業をはじめめることをきめ、大正九年にモード・パウラスは熊本へ赴任した。宣教師会の話しあい、不幸な老人や子ども、少女たちのための慈善事業の施設を建てるのが決議されて、パウラスはその責任者にえらばれたのである。パウラスが三一歳のときであった。第一次世界大戦後の不況のしわよせは弱者たちの肩にかかっていた。大正デモクラシーの美名にかくされたこの時期は、

子どもたちは捨てられ、少女たちは売春婦に売られ、生活のできない老人たちは乞食となり、底辺に解決できない社会問題をかかえても政府は打つ手も持たず、社会福祉事業のほとんどが宣教師たちによってなされていた時代であった。

パウラスが一ばん頭をなやましたのは売春婦の問題ではなかったろうか。捨てられた老人や子どもたちとちがって、売春婦は必要とする人たちがいた。彼女たちが捨てられるときは病気がひどくなくて役に立たなくなるときであった。「逃げてわたしの所へ来さずれば、だれでも売春生活から救ってあげる」と遊廓の近くで叫ばねばならなかった川瀬徳太郎牧師や、遊廓に売られた女たちが逃げてくる家として、宣教師館の所番地をかけたパンフレットをくばったネルセン夫人の協力があつた。新聞記者は貧民の状態について敏感で、週に何回も話をききにやってくる。面倒をみて、一年半前に洗礼までつけた娘が母とともに売春をしていたのをしったパウラスは、「救い難し」と思って、もう二度と日本へくることはあるまいときめて、大正七年から五年間くらしした日本、そのうちの三年間を過ごした熊本をあとにする。熊本市外の健軍村神水にパウラスを園長として慈愛園が開園されて二ヶ月あとの大正一二年六月二八日より二年間の休暇であった。

日本での苦勞が身にしみ、アメリカほど完璧な美しい国はないと思つていた。パウラスは、五年ぶりに帰国して、アメリカも完全でないとして大きなショックをうける。パウラスはアメリカに何を見たのであろうか。アメリカが變つていたのではなく、日本の五年間がパウラスを大きく成長させていたのかもしれない。休暇をおえて再び熊本に帰つてきたパウラスは、もう迷ふことなく自分の仕事

にうちこむことができた。孤児、老人、売春婦の問題だけでなく、熊本の人たちは困つた問題があるとパウラスの所へ相談にきた。あらゆる階級の人が私生児の始末をするのにパウラスの門を叩いた。慈愛園とカトリックの修道女会の経営する施設が、私生児のおちつく所であつたが、それは百人の私生児のうちの一人であつたと、パウラスは自伝『愛と福祉のはざまに』に記している。

慈愛園で成長した少女たちの進学問題がおこつたとき、九州女学院に入学させたいというパウラスと、周囲からの圧力もあつて、施設の子を入学させたら学校の評判が悪くなるというエカードとの間に大論争がおこつた。結果的には試験に合格して入学できたが、この二人の少女たちが専門学校を出て女学院への就職問題がおこつたときに、ふたたび論争がおこつた。たてまえとほんねの葛藤であつたが、パウラスの主張がみのつて、二人は女学院の教師となることのできた。救済事業と女子教育は矛盾するものなのだろうか。パウラスは七〇歳になつて慈愛園々長を潮谷総一郎氏にゆずり歸国した。彼女が在職中に面倒をみた人たちは六五〇〇人をこえる。一昨年（一九〇八年）六月一六日、生まれ故郷のノースカロライナ州のパバーで九一歳の生涯を閉じた。

戦前の日本で、社会のくるしみを一ばんよくしてつていたのは、社会事業にたずさわつた外人宣教師ではなかつたらうか。

(七) ハリストス正教会

(1)ギリシア正教は日本では日本ハリストス正教会とよばれ、東京は神田駿河台のニコライ堂がその本部である。

一八五八（安政五）年にロシアとの間に通商条約がむすばれて、

函館にロシア領事館がおかれた。ニコライは領事館つき司祭として来日するが、正教会はじめての駐日宣教師であり、二五歳の若さであった。ロシア領事ゴシケーヴィチは北京で正教の伝道をした経験をもっていた。一八五二（嘉永五）年にはプチャーチンとともに来日したこともあり、大変な日本通であった。ニコライはキリスト教が解禁になるまで、ゴシケーヴィチのもとで日本研究に没頭し、ロシア語と日本語の交換教授をしながら過ごした。

日本脱出のとき便船を待って、函館でニコライのもとに身をよせた新島襄に、ニコライは機を逃さず『古事記』を読む手助けをしてもらっている。沢辺琢磨の世話でアメリカ商船ベルリン号に乗りこみ、新島は密出国したのであるが、沢辺は土佐の人で坂本竜馬の従兄弟にあたる。ニコライを斬るつもりでニコライに近づいたが、あべこべに日本での正教の第一番目の受洗者となった人である。ニコライは後任者のアナトリーに函館をまかせて、明治五年に東京に出るが、その年に駿河台の土地を買収した。そして明治一七年から大聖堂の建築にかかり、八年目の二四年に完成した。ビザンチン様式の威風堂々の大聖堂は、当時の東京の人たちにどれだけのおどろきをもって見られたことであろうか。ニコライは日露戦争のときも帰国しなかった。七万余といわれたロシアの捕虜にたいしての精神的、物質的援助を日本政府もみとめていたようで、そのころの日本政府はまだ寛大なところもあったとみられる。ニコライは明治四五年に永眠した。

(2)ギリシア正教が熊本県につたわったのは明治一二年である。大阪正教会から高島司祭が金森伝教師を伴って赴任し、明治一四年に一名の受洗者があった。同年熊本市内の坪井に会堂が建てられた。

明治三二年に教会は水道町に移転した。明治三七年の草葉町教会のクリスマスに、教員がコーラスの指導をうけていた正教の高橋伝教師（のちの高橋長七郎神父）が、ロシアの捕虜将校を大勢つれてきて参加した。捕虜といっても、美しい空色の長い外套を着た将校たちは実に立派で、草葉町教会があれほど盛なクリスマスをしたことは、おそらくあとにも先にもなかっただろうと、当時五高の花陵会員だった古屋野宏平は「ともしび」紙に思い出を書いている。声量ゆたかで魂の底からうさぶられるようなロシア民謡のかずかずを想像させるが、ギリシア正教の聖歌は無伴奏で特徴がありすばらしいということである。日露戦争のころ「ロシアうつべし破るべし」という歌がはやって、それをうたっていたら、ロシア軍にうち殺されるぞと先生に叱られたという話を、宮崎民蔵の姪の林田サツさんは語っておられるが、日露戦争、ロシア革命、二回にわたる世界大戦は、ロシアの国教であるギリシア正教にとって苦難の道であったにちがいないし、いろいろな迫害もついでまわったと思われるが、ちょっとしたエピソードは当時の様子をよく伝えている。

(3) 吉地方の正教は、倉本乙蔵という菓種商が伝教師小杉雅枝をともなってきた、明治一七年に伝えられた。現在では、司祭の藤平重信氏が熊本市と人吉市を往復して教会員の面倒をみておられる。藤平夫人のマサさんは祖母の代よりの正教の家のうまれである。祖母のスマは一八六五（元治二）年に福岡県の柳川の志賀家に生まれ、海老名弾正のいとこにあたる。受洗の動機はわからないが、娘時代に高岡神父より受洗し、人吉の医者塩見春亮と結婚してから夫を感化し、春亮は「ヤソ医者さん」とよばれた。娘のハマは明治一一年生まれ、もともと禪宗の家であった夫の北御門俊雄を正教の信

者にしてしまったところなど、二代つづいて婦唱夫隨の家である。三代目のマサさんの弟がトルストイの翻訳者でしられた北御門二郎氏である。兵役を拒否してまで平和主義をつらぬくはげしい思想は、花陵会の人たちのなかから出たのではない。熊本では村本一生のように、五高を卒業してから入った灯台社のキリスト者から、あるいはまた北御門氏のように、ごく少数の教会員しかいないギリシア正教を信仰する五高卒業の人たちのなかから生まれているのは興味のあることである。

(八) カトリック

(1)近代日本のカトリック教会の基礎をつくったのは、パリ外国宣教会の神父たちであった。一八五九(安政六)年には神奈川、長崎、函館の三港でアメリカ、イギリス、フランス、オランダ、ロシア五国との自由貿易がはじめられ、ジラール神父が来日し、翌年プチジャン神父とフェーレ神父が長崎に上陸する。先ず横浜に天主堂が建てられ、次いで一八六五(慶応元)年には長崎の大浦天主堂が完成した。キリシタン時代の信徒の子孫が残っているかどうかをしらべることは、布教とおなじく大事なことであり、この年プチジャン神父によって一五名の信者が発見され、更に浦上には一五〇〇名の信者がいるばかりでなく、全国各地にいることがわかって、このことは世界中のカトリック信者に報道された。けれども明治政府のキリシタン圧迫は幕府以上にきびしく、明治三年には浦上の信者たち全員をとらえて全国二一ヶ所に流罪とし、いわゆる浦上四番崩れがおこった。

プチジャン神父はキリシタン発見の功績で司教となった。彼は日

本を南北二つの教区に分け、彼じしんは南部地区の宣教を担当した。日本の現状を詳しくしらべて、教育事業、社会事業、病院の設立などの仕事にたずさわる人たちの派遣をフランスに要請し、明治一〇年に幼きイエズス修道女会の四人のシスターが来日する。のちに熊本に多くの業績をのこしたメーブル・フランソワ・ド・ボルジアがそのなかにいた。

(2)明治六年以後は、長崎から神父たちの天草への往来も頻繁であったし、大江天主堂、崎津天主堂も建てられていたが、熊本市にカトリックの伝道がはじめられたのは、市制のしかれる直前の明治二二年三月一日、ジャン・マリ・コール神父の赴任によってである。二月一日には大日本帝国憲法が發布されて、新しい日本の幕明けとその内容もしらすにみなが浮かれているようなときであった。コール神父に招かれたメーブル・マチルドら四人の幼きイエズス修道女会のシスターが山崎町で布教をはじめた。来熊の翌日にはもう孤児が三人ひきとられている。明治二五年に草葉町に引越したとき、近くには前年の秋より第五高等中学校の教師となったラフカディオ・ハーン(小泉八雲)が住んでいた。外人同志の親しさでコール神父は毎日のようにハーンを訪れたという。カトリック嫌いであったハーンは、神父さえも見るのがいやだったのではないだろうか、一年あまりで手取本町の家から坪井に引っこしてしまった。このころの手取本町、草葉町の界隈は、外人宣教師や神父やフランスの修道女たちの往来があつて、国際的なぎやかさがあつたらうと思われる。

明治二七年にはメーブル・ボルジアが着任して修道院も落成し、玫瑰館と命名されて伝道婦養成学校も開設された。看護婦の資格をも

ったシスター・スタニスラスが来熊し、病人訪問の仕事も楽になった。明治三二年には診療所が開かれて、のちに聖心病院となり、明治四二年にコール神父よりイエズス修道女会に寄贈された。明治三三年には玫瑰女学校（現在の信愛女学院）が創立される。メール・ボルジアが一年前に岡山玫瑰女学校を創立したときの初代校長の経験を生かして、九州でははじめてのカトリックの女子教育の学校であった。明治四三年に孤児たちの養護施設は天使園と命名される。メール・ボルジアは幼きイエズス修道女会の熊本での仕事の基礎をつくり、日本への奉仕を五六年間つづけて、昭和八年三月八日に八三歳の生涯を閉じた。日本にきて一度もフランスへは帰らなかったということである。

(3)コール神父は明治二八年に熊本市郊外の琵琶崎（現在の島崎）に土地を求めて、ライ患者を二名ひきとって一緒に生活をはじめた。ハンナ・リデルが五高のうらの立田山麓に回春病院を設立した年である。次に琵琶崎に隣接した中尾丸に土地を買って三〇名の患者を収容したが人手が足りなかった。どうしても専門の病院を建てる必要を感じ、ローマ法皇庁に手紙を書いて、救ライ事業にたずさわる修道女たちの派遣を求めた。そしてそれにこたえてマリアの宣教師フランシスコ修道女会のメール・マリー・コロンバラ五人のシスターが、明治三一年一〇月一九日に熊本に到着した。この日が日本のフランシスコ修道女会と待労病院の創立の日とされている。翌日救ライ事業はイエズス修道女会よりフランシスコ修道女会へひきつがれることになる。明治三二年に東京の軍医学校から第一二師団軍医部長に転任させられた森鷗外は、その年の九月の末に熊本を訪れて、藤井某の経営する治癒院共立難病医院と、カトリック教「フ

ランチスカアネル」派のフランス女子数人の経営になる救癒院と、立田山麓の回春病院のことを『小倉日記』に記しているが、創設されてまだ一年もたたない待労院のことを、鷗外は職業柄しっていたと思われる。

シスターたちが仕事を始めて二ヶ月後、本妙寺境内で幼児を抱いて行き倒れていた女をひきとった。同居して面倒をみていたが、母親が亡くなったあとに残された子どもを育てたのが聖母愛児園のはじまりであった。四、五年あとには外国からシスターの応援があった。シスターたちにひかれて、彼女らとともに働きたいという日本の信者の娘や、特に長崎のキリシタン迫害に耐えた旧信者の娘たちが集って、働き手も多くなった。明治三三年には琵琶崎に一万五千坪の土地——古い武家屋敷でお化け屋敷といわれていた。いまま土蔵がのこっている——を買って、翌年一〇月には収容人員八五名の新病棟が完成した。そのあと中尾丸の建物は施療所として治療をつづけていたが、昭和二七年に琵琶崎聖母慈恵病院と名称を改めた。安心してお産のできる病院として有名であったが、最近人手にわたった。牛を飼って乳をしほり、それは孤児たちの大事な栄養源であった。にわとり、馬、豚、羊、兎と動物園のように家畜を飼い、野菜をつくり自給自足の生活、という話をきくと私たちはヨーロッパの農家の生活を想像する。大正四年には米俵につめられて捨てられていた八二歳の老婆をひきとって面倒をみたのが養老院のはじまりとなった。

コール神父が深堀神父とともに人吉を訪れたのは明治二九年である。まだ鉄道もなく不便であった人吉に土地を買い、五年かけて、球磨地方の豊富な木材をつかった教会が明治三六年に完成した。三

年後にはフランシスコ修道女会のメール・マリア・メルセデスとその他の二名が定住し、復生院施設所が開かれた。皮膚病の薬がよくきくというので、宮崎や鹿児島からも患者がおしかけてきたという。

(4) コール神父が招いた三番目の修道女会は八代のシャルトル聖パウロ修道女会である。神父は熊本にきた年、八代に伝道にでかけているが、明治三年五月一三日、東京で社会事業の経験をつんだスール・ウラリ・ド・ラ・クロワが他の二人のシスターとともに赴任した。すぐに三人の孤児をひきとって育てるが、また貧困者のための施設院を開き、後の養護施設ナザレ園、博愛医院の基礎をつくった。一方塾をひらいて編物、洋裁、手芸などを教えていたが、明治四二年九月には八代女子技芸学校（現在の白百合学園）として認可をうけた。

(5) コール神父は明治四四年二月九日、その苦勞の多かった生涯を閉じた。六一歳であった。神父の墓は昭和二七年一〇月一五日に手取本町の教会から、島崎の聖母の丘の一隅にうつされ、四一年ぶりにシスターたちは神父と対面した。神父の穿いていた靴だけは葬られたときのままであった。そのすりへった踵を見て、「神父様はよく歩かれたのね」と、あらためて神父の偉大な事業に思いを馳せたという。神父の墓の横には、せまい場所に白い十字架が林立している。「あなたは日本からまっすぐ天国へ行きなさい」とフランシスコ修道女会のマリア会長に言われて、明治三年にはじめて日本にきたメール・マリア・ベアタの墓をはじめとして、その生涯をライ患者と、家族から見捨てられた気の毒な子どもや老人たちに捧げて亡くなったシスターたちの墓である。日本人もいるが、外国人が庄

倒的に多い。十字架に書かれた略歴を見ると、三〇代、四〇代と若くして亡くなっている人の多いのに気がつく。過勞と栄養不足ではとんが結核にかかって亡くなったということである。八五年の歴史を語るシスターたちの墓地を訪れた四月のはじめ、身のひきしまるような思いを椿とスミレの花がやわらげてくれた。

ゲルビザさんは満九二歳をすぎていて、いま島崎の修道女会の最長老である。大正二年に二四歳で来日し、札幌の天使病院で九年間看護婦として働いて、熊本に赴任した。現在待勞病院の門の左脇に当時の建物の一部がのこっているが、その建物の治療所でドイツの先生といわれて多くの患者に慕われていた。皮膚病、眼病が多かったとのことである。不況の時代や、殊に戦前戦後は遠方から伝えきいてくる患者が多く、よく効くと評判の皮膚病の軟膏が足りなくなつて、人吉までもらいにしかけたこともある。日本にきて六九年、ゲルビザさんは一度もドイツへ帰ったことがない。六人の姉妹のうち五人が修道女となり、日本にくる途中コンスタンチノブルですぐ上の姉と逢ったのが、肉親と逢った最後である。その姉も数ヶ月あと病気で亡くなった。先日二人のドイツ人が手取本町の教会をたずねてきたとき、教会の人がゲルビザさんの所へ案内してきたが、急にドイツの言葉が話せなかったと言ってゲルビザさんは笑った。いま西ドイツにたった一人のこっている八〇歳になる妹さんと始終手紙のやりとりをしているので、書くことは得意であるが、日本語を話してすごしてきた七〇年は、ゲルビザさんにとっては、母国語を忘れるほどの長い年月だったのである。九州で働いていた外国のシスターたちは、昭和一九年の四月ころから福岡県の英彦山中に強制疎開をさせられた。ゲルビザさんらフランシスコ修道女会に当時

一〇人ほどいた外国のシスターたちは翌二〇年に戦争がおわって、秋風のはじめるところやっと島崎に帰ることができた。そのときのことをゲルビザさんはあまり多く語らない。食糧は配給であったそうだが、配給のものだけ食べていて栄養失調で亡くなった人もいたほどだから、その生活はさぞやと察せられるだけである。ここなら安全だろうと軍隊の食糧を礼拝堂のなかに入れてあったが、敗戦後使い主のなくなったその食糧は、進駐軍からつかってよいとの許可が出て、思わぬ恩恵となったのである。一メートル八〇以上あるうかと思われる長身のゲルビザさんは童女のように美しい無邪気な顔で、とても九二歳とは思えない。五時起床のシスターたちの誰よりも早く起きて、誰よりも早く御堂に入ってお祈りをするゲルビザさんは、シスターたちの敬愛の的であり、聖母の丘の主なのである。

フランシスコ修道女会は現在日本の二三ヶ所で社会事業、医療事業、教育事業にたずさわっていて、四〇〇人の修道女たちのうち七〇人が熊本県で働いている。待労病院の前には初代院長メル・マリー・コロンバが植えたユーカリが大木になっている。ユーカリの葉は風邪薬としてシスターたちの常備薬であったのである。明治四五年に建てられた木造の修道館は、白蟻の被害のために昨年とりこわされ、近代的な鉄筋の建物にかわった。現在四五人ほどのシスターたちの宿舎である。

昭和二十六年に社会福祉事業法が制定されて、翌年五月二十四日に社会福祉法人聖母会が発足し、待労院も琵琶崎待労病院と改められた。外国からの寄附でまかなわれていた施設も、やっと国の補助をうけられるようになって、シスターたちの経済的な苦勞はなくなっ

たが、また別の悩みができてきている。修道女を志す人たちが少くなっていることである。年をとったシスターたちはみんなの暖い看護によって老後を心配なくすごしているが、現在の働き手であるシスターたちが年をとったときは、果してどうなるだろうかという心配がある。働きざかりの若いシスターたちはほとんどん外国に出ていって、残されたシスターたちの高齢化がすすんでいるからである。

熊本は熊本バンド発祥の地であるが、熊本にプロテスタントの伝道がはじまったのはよそよりおくれれている。非常に先駆的なものをもちながら日和見主義というのか、明治政府にものりおくれた後進性というのか、なにかがキリスト教布教にもみられるのである。回春病院や待労病院、慈愛園などの社会事業が外国の女宣教師やカトリックの修道女たちによって営まれてきたことは後進性の象徴であろうか。九州学院と九州女学院は埼玉に聖望学園が創設されるまでは、熊本にしかないルーテル教会の学校であった。このように宣教師たちは熊本で大きな業績をのこしているのだが、熊本の女キリスト者たちは家族ぐるみの信仰であったようである。矢嶋家、徳富家、宮崎家、田添家、徳永家、北御門家などにみられる女キリスト者の役割は大きいものがある。

熊本は戦災と、昭和二十八年の水害で教会の記録などもなくなってしまった。それでも教会の牧師さん方や修道女会の方にはいろいろと御指導いただきましたし、女キリスト者の親戚の方がた、その知人の方がたからも親切に教えていただきました。かきとめましてお礼の言葉といたしたいと存じます。

花陵会のこと

林 葉子

(1)

(旧制)第五高等学校基督教青年会の、資料が保存されているので、熊本大学の近沢龍雄教授におねがいして見せていただく機会を得ました。それは明治二十九年五月二三日から現在まで、すなわち

(旧制)第五高等学校の花陵会から、熊本医科大学、熊本工業専門学校、熊本薬学専門学校、熊本師範学校のキリスト教青年会の伝統を受けついで(新制)熊本大学キリスト教青年会である花陵会の、今日に至るまでの記録であります。明治二十九年の頃これを書いた人びとは、もう此の世にいないのに、その文字は和紙に墨痕もあざやかに、流麗な筆跡でまるで昨日のこのように、当時の様子が記されているのには感激しました。昭和に入る頃からの横がきノートに記されたものが、紙やインクの色も変り、とじ糸も切れて解体寸前といった表情をしているのに比べて、明治時代の筆がきは立派なもので、明治人の心意気を示しているようです。現在私たちの使っている紙やインクの寿命の短かさ、はかなさに思い至って、足もとのゆらぐ不安をおぼえました。長年の風雪に耐えていま残っている資料は次のようです。

(1) 花陵会史 第一輯と第二輯(一緒にしてある)。明治二十九年五月二三日から明治三十一年四月一八日までの例会ごとの記録。

(2) 会館日誌 一六冊(1~16の背番号あり)。明治四五年四月

一五日から大正六年二月一九日までの日誌。

(3) 会館日誌 一六冊(22~31の背番号。32号から背番号がない)。大正九年一月二日から昭和一〇年八月二八日までの日誌

(4) 会館日誌 三冊 昭和一二年九月一日から昭和一四年五月二七日までの日誌。

(5) 会館日誌 三冊 昭和一五年一月から昭和一七年二月一日までの日誌。

(6) 会館日誌 一冊 昭和四〇年九月一三日から昭和四一年七月三日までの日誌。

(7) 会館日誌 一冊 昭和五二年一〇月一〇日から二月六日までの日誌。

このほかに印刷された『花陵会三十年史』(明治二十九年五月二三日から大正一五年までの会誌などをまとめた)があります。また会員名簿と建築記録簿と会計簿とが、それぞれ数冊と写真多数があります。

会館活動は昭和四〇年代の始め頃までは、それなりの活動を続けていたけれども、昭和四四年を中心とする学園紛争の時、過激派分子が侵入して花陵会館をアジト化し、また公安関係にマークされて受難の時代があった。今は会員一〇名ばかり、会館誌も書き真面目に努力している(洗礼を受けた者はいない)と、現在の花陵会の役員の一入である横瀬久扶氏が説明を下さいました。

印刷された『花陵会三十年史』のはじめと最後の数ページは失われて、七ページから四〇ページまでがのこっています。誰がいつ何部作って、どの様に配布されたものでありましょうか。これと同じものがまだどこかに、健在なのではありませんまいか。この『花陵会三十年史』は、明治三六年四月一日第一一四回の例会まで、会合の順を追って書いてあります。それは筆で書かれた『花陵会史』とひきあわせてみましても、萬國学生キリスト教青年会同盟会幹事であるジョン・アール・モットが来熊した時の、講演内容を省略したり、ところどころの省略や字句の入れかえがありますが、大差はありません。第一一四回例会のあとは「此頃より会の記録散じて歴史詳ならず、仍て断續せる記録や諸種の材料を集輯して、主なる事柄のみを記さんとす」とあって、明治三六年から先は年次別にまとめてあります。最後に「追懷録」がありますが、この後半は消失しています。

印刷された『花陵会三十年史』から、失われている最初の部分は、「花陵会史」によって補足できますので、次に記してみます。

第一回

伊津野 直誌

回顧は花陵山頭 老松風清ふして青苔滑らかなるの邊 數十の健児 相共に跪坐して彼の謹嚴壯烈なる献身の誓盟を捧げたるは はや十有余年の昔とぞなりぬる……今や正に世界の全局面に向つて優に一頭地を拾出したる認めざるものあらんや 而して日本の中心に一大生命となり以て精神的變化を促し来りし者は 是れ正しく基督教の感化其多きに居らざんばあらず 而して又基督教の中心に一大勢力となりて 献身的熱火を灑ぎ来りし者は亦た以て彼等健児の

指導其多きに居らざんばあらず ……而して又た現今我國の位置外甚だ強盛なるが如くにして内頗る慙劣云ふに忍びざるが如きものあるを視る 嗚呼誰か……明治廿九年五月廿三日 恰も初夏の候に……各自の毅然たる決意と靄然たる友情とを表明せり……曾て彼の先輩が献身を誓ひし処……山を下り帰路蕎麦屋樓上に登りて各ザル二碗を傾けて相別れぬ 当日来り会せしもの凡て七人 小池眞藏 都築清 松本岩太郎 生田能治 金子一狼 澤村晴夫 伊津野直

これらの資料によって、花陵会の様子や盛衰を、このたびは明治期にかぎってみることにいたします。

(2)

明治二九年五月二三日に、第一回の会合を開いて発足した花陵会は、会を重ねて第二回会は、一月二六日ジョン・アール・モットを池田ステーション（いまの国鉄上熊本駅）に迎えたあと、紺屋今町の聖公会集会所で、その歓迎会となりました。三〇日再び池田ステーションに送るまでの間には、萬國青年会同盟に加盟の決議をしたり、花岡山上の鐘懸松の下で写真をとったり（会館にある沢山の鐘掛松の下での写真のうちの第一号です）、長崎、山口、佐賀、福岡の各高等学校、中学校青年会の代表者と、日本南部青年会聯合同盟会をつくったりします。長崎の鎮西学館からは代表者として、田添錠二が笠森字一郎と共に来て、花岡山の早天祈禱会にも参加しています。この世界学生基督教連盟運動の傑出した指導者モットを、熊本に招いたのは、モットがオーストラリア学生基督教青年会を訪問しているとき、花陵会の学生が手紙を送り、どうして学生基督教

青年会運動を、成功させようかと訴えたものに深く感激して、モットが特に都合をつけたからだといひます。長崎上陸後まっすぐ熊本に來たモットは、このあと各地を廻り、翌年一月四日に初めて上京しました。モットは三〇歳でした。五高の校内には花陵会に反対の運動をする者も出ておりますが、會員心を合わせ互に慎しみ、謙遜に無邪氣に身を処して、神の力をたのんでゆこうとします。

翌三〇年一月一日は早朝紅葉山に登り神と交通し、一月九日は花陵会代表聯合中央委員としてブランドラムを推し、四月一日には世話になった平山牧師が台湾に行くので送別会を開き、四月二日には日本同盟大会、高等学校基督教青年会中央委員として、九州中国を巡視する伊藤俊介を迎えます。五月二三日午後四時を期して、雨の中を花岡山に登り萬日山に廻って、一周年記念の祈禱会をし、東京庵でザルそばをたべ晚餐式としました。参加者九名です。

この花陵会に自炊寮の必要を感じて、九月末から金子、三原、松本の三名は、美以教会信徒である仁木城主夫妻と、仁木氏と懇意だという理由で小山景雄、森谷精一の二人と合せて七人で、西勤身崎町一五一番地磯貝氏の貸家を七円で借受け同居しました。そして家賃の頭割り一円宛の負担と食費の三円五〇銭を出して賄を受けることに決めましたが、一ヶ月ばかりして仁木の算用が合わないものとみえて、此所を退散せねばならなくなりました。紆余曲折のあげく、一月一日から「我第五高等学校の敷地境を距る半丁の処、飽託郡黒髮村大字坪井二〇七番地の邸を借り」自炊を始めることとしました。家賃は一ヶ月四円五〇銭、間数は六帖三室八帖一室及び台所附六帖一室があり、一室を応接間として賄方を竹内壽良内儀に依頼し、報酬として母子二口を養う約束をし、各人は一ヶ月四円五〇

銭宛を出して、家賃並に食料を共にすまず見込をたてました。一月三日自炊寮の開始式を行ない、会則をつくり、事務所を当分此の自炊寮としました。これが花陵会館の出発点です。まもなく物価騰貴の影響をうけて、ふつうの下宿よりも一層の粗食に甘んじながらも、毎月一人の入費は六月に達する状況になりました。解散を決意したことも一度や二度ではなく、粥と塩青のりに舌つづみを打ったのも相当ながいあいだ続いたと、當時を追懐して松本岩太郎教授が書いています。然し自炊寮は花陵会の事務所を兼ね、倶楽部を兼ね、図書館を勤め、堂々と花陵会の名を掲げて設立したものですから、面目にかけても廃するわけにはいきません。解散が叫ばれる度に熱心な反対説が主張され、全會員の同情を希望したり、夏休み中の借家料はブランドラムが寄附を申し出たりしながら維持されました。年末には花陵会の提案で熊本の諸教会の聯合クリスマス会をひらいたりしました。

明治三十一年は四月四日と六日に、小倉で第七回九州福音同盟会が開かれ、そのため派遣員が來熊したり、會員が小倉に出かけたりしたのに続いて、四月一日と一九日には萬国青年会派出員フキツンヤ、スウキフト一行が熊本を訪れ、四月二二と二五日には長崎で行われる日本南部学生基督教青年会（遠山參良が通訳する）に出席しました。そして創立二周年記念日を前に、ブランドラムは、自炊寮の地所購入金の都合がつきそうだということと、來学年（三二年九月）から五高英語囑託教師としてブランドラムが聘せられるという朗報を持ってきました。敷地購入の件は、英国伝道会社から派遣の日本在留の宣教師一同の集会有馬（神戸市）の地に開き、ブランドラムも出席したとき、花陵会のために地所購入の全額を当分

ブランドラムの手から出し、後に英米特志の義損を仰いで、此の金額を支払うと定めて、米国の募金は近日帰国するスキフトに委任し、英国の募金は松江に在留の宣教師エフ・アール・バクストンが今夏帰国するから尽力すると約束したというのです。ブランドラムの名義で四百パウンド（三千九百円ばかりに当る）を英国で借りて、それを長崎にある上海香港銀行支店を経て受取り、長崎から若松の銀行家笠氏に送り、熊本に引寄せます。この借金の利子は一ヶ年およそ二百円位で、これはやはりブランドラムが支払います。差当り一日も早く地所を手に入れること、二年たてば二倍になり、三年たてば三倍になって騰貴するのは眼にみえているから。購入に關しては耶蘇教に關係があるとわかれば非常にまずいから、充分秘密を守り局外者の名義で円滑な妙手段を施すこと。またこのことは公平無私を主義とし、基督新教五派全派の事業とし、九州全体の事業となし、一派の事業としてはいけないこと、だから財産保管委員は各派各地から公平を以て選び、成功と永続をはかることなどが話しあわれました。ブランドラムと花陵会員との間にあった並ならぬ信頼と友情と、ちみつな計画に胸があつくなりなす。地所買収の交渉は一〇月一〇日に始まり、地主久富氏は、その公共的的目的に賛成して、一二月二日登記がすみました。またブランドラムの五高囑託教師の件は、夏目金之助教授の意見によって、毎週八時間英語教授のため囑託講師として聘したいと通達があつたので、有馬の集會の時に謀り、監督の賛成を得て承諾することとなつたのであります。しかも氏は教師として聘せられるが、一方では今までと変ることなく基督教につくすことは、勿論学校でも承知の上であるということです。五月二三（日曜）日は萬日山で創立記念の祈禱會をし、参

加者一六名でした。

明治三二年一月三〇日午後二時から花陵會館定礎式が挙げられ、三月二日には日本基督教會の植村正久が來會しました。四月六（八日は日本学生基督教青年會九州部會が開かれました。五月の第三回創立記念日は「二三日は火曜にして學業の多忙なるため二（日曜）日午後二時」とし萬日山で、來賓として牧師四名、教授一名、講師二名、濟々聳蛇鶴會（此の年四月二八に設立されて濟々聳基督教青年會、會員七名）から三名が参加しています。「會費は十錢以上にして五錢以上を會計委員に渡し、五錢以上にて各自望の菓子類を買來ること」とあります。

(3)

『花陵會三十年史』には明治三二年九月以降を第二期發育時代としてあります。よるべき地を得て入會者もふえ、一〇月にはフキツシャ、平澤兩名が九州各青年會巡回として來熊し、一二月三日には自炊寮記念祝會をし、また蛇鶴會と共に当地諸教會聯合親睦會をしたりしています。前年一〇月には「花陵會が其抱負にも似ず少しも学校中に重きをなさざるは、會員の熱誠に欠ぐる所なきか、はた我心にのみ依りて神の意に従うことを忘れたるにあらざるか」との感話がありますが、三二年一月三日には「今や吾等の學校に対する位置は順境にして、其の困難なる逆境は先輩の熱心なる働きに破られたり……」とあります。互に酒煙草をいましめあつて、私心を去つて神の心に献身する態度は、短い期間に周圍を変えていったのでありましょう。當時の若者にとっては清新味溢れる聖書の教義と説教に、光明を見つめ、心中苦惱のすえ基督教を信することとなり

ました。こうして若い力にあふれた花陵会の活動は、熊本のカリステ活動の中心になっていきました。

明治三年は一月八―十三日、聯合祈禱会を各教会で順次開き、毎夜六、七〇名の熱心な集まりがあり、ある者は自分は十余年間信者として暮しているが、本年のように初週祈禱会の盛だったことはないと感激しました。また東京での中央青年会に出席しての報告がありますが、花陵会の優秀さが注目をあびています。四月一九―二十一日には佐賀で開かれる筈であった九州福音同盟会を熊本で開き、熊本基督教各団体の中で活躍しました。五月の創立記念会は二〇日午後三時から、花陵会自炊寮で春雨の中に、ブランドラム宣教師と、藤原牧師と遠山参良、蛇鶴会を迎えておこなったとあります。

明治三四年は一月六日午後二時から三年坂教会で各教会聯合して、ブランドラム宣教師の追悼会がありました。ジョン・ビー・ブランドラムは、前年一月宣教師大会から帰熊して、脳の加減が悪かったのですが、一二月二日夜から俄に病が重くなり、療養のため香港に行く途中の上海で二十九日、夫人に四子を委ねて長逝し、同地に埋葬されたのです。ブランドラムは第五高等中学校が設立されたと同じ年の明治二〇年に、熊本に来て最初の聖公会定住宣教師となった英国人でした。一〇月五日には創立者の一人である松本岩太郎が、五高教授として赴任してきました。一〇月二十九日午後三時には、ジョン・アール・モットを上熊本停車場に迎えて（二度目の来熊）、一〇月三十一日午前一時離熊までの間に「基督の弟子たらんことを誓い姓名を記した者」が二一名あったといっています。その後三週間の特別伝道が開始され、当時三〇名以上いた会員の中のある者は熱狂的に活動し、求道者総数は八百に達しました。一月二日

には「本会の記念日を自炊寮の記念日に合して、一月に開くこと」として午後七時、三年坂教会堂で花陵会創立記念演説会を、六〇名の聴衆を前に行ないます。一月六日には一〇五回目の例会を開きました。花陵会創立以来会員の献身によって会は順調にのび、年毎に盛会となってきましたが、このあたりが一つの頂点なのではないか。このあと四ヶ月間の記録はありません。

明治三五年は四月二―六日に第五回西南部会及び春期学校が開かれ、その第三日目の夜七時からミス・リデル宅で文学会がありました。このあとはまた記録がとだえがちで、秋になって「熱狂時代は過ぎて反動の時代来れり……我会の集会も亦漸次不振の状を呈せり、加ふるに中央教会に於て植村 海老名両氏の教理上の論争起り、我会も亦其余波を受けて論争の渦中に投ぜられたり。遂に感情問題迄惹起し、暑中休暇前は殆んど其頂点にして、我会の危機とも云ふべかりしなり。」とおもくろしい様子をのべ、「新秋に際し互に憂を抱いて相集まりし会員は、誰いふとなく花陵会は教理の議論をなす処にあらずして、信仰的友情の団体なりとの考え……数ヶ月前の暗雲何時の間にか晴れ渡り、友情の光明は会内に充ち溢るるの観ありき」とあります。九月一七日花陵会会則を制定し、九月二三日新会員の歓迎会をミス・リデル、ミス・ノット、ブランドラム、マルチン、ピータースなどの宣教師、当地の牧師たち来会しておこない、集まる者五〇余人でした。一月三（土曜）日には創立記念会、記念演説会があり、三年坂教会堂に百数十名があつていました。この様な盛会は創立以来未曾有のこととよるこんでいます。一月一六、一七日の両夜は三年坂教会で、熊本では始めての西洋音楽会を開き、純益金八十余円を得て、荒廃した会館の修繕と敷地の

整備にあてました。この頃の会員である中津親義（五高文一六回生、花陵会は明治三四年入会の六回生である。聖公会信徒で教会委員、執筆となる。最初の熊本市YMCAを福田令寿とともに設立した。熊本県立図書館の初代館長。昭和七年六月二八日昇天享年五〇歳）の「追懷録」によりすると、彼は落々覺時代代に蛇鶴会を創立し、五高に入学して花陵会員となって間もなく、モットが来熊したので熱狂的に活動しました。海老名弾正と植村正久が、「新人」と「福音新報」誌上で論争の時は、会内で毎日議論をし、オルソドックス派は上垣、小西、草野、中津。ヘテロドックス派は吉田、妹尾、今岡、高田らでしたが、吉田が入院をしているベッドに腰かけて、四時間も討論し看護婦を驚かせたりしました。当時遠山参良による聖書研究会の講義で、ヘテロドックスの攻撃をするので、今岡たちは隣の室に居りながら、会には出なかったそうです。当時の講演は殆んど、正統派擁護の講演でありました。三五年の春に西南部会に出席した元田、笹森、フキッシャー、宇野などの講師が、その旅館丸小に反対派の人びとをよんで、訓話をしたこともありましたが論争はやまず、とうとう夏休み前にはヘテロドックス派の人々に、会を出てもらうより外に途がないと決心するまでになったと追懐しています。ちなみに海老名主筆の『新人』では、花陵会第一回生の三澤糾が、三三年の秋東京帝国大学（文）に入学してから、その編輯を引き受けて活躍していたのです。（論争は三四年九月一日〜

三五年七月二四日）

(4)

明治三六年は、二月八日に萬国学生青年会祈禱会を例によって幸

粥を食して行ない、四月一〇日は海老名弾正を自炊寮に迎えています。そして四月一八日組合教会牧師高橋鷹蔵と聖公会教師として英国から来任したモールの歓迎会を兼ねた第一一四会のおとは、会数をかぞえた記録はなくなっています。それで明治三六年から三八年までの創立記念日の記録はありません。

明治三七年四月長崎で開かれた青年会南部会に、会館建築の議を提出して代議員全員の賛成を得、九州の第一の会館設立として金四千円を米國で、金三百円（後五百円とあらためる）を内地で募集することに決めました。

明治三八年には公開文学会を開いたり、夏期休暇を利用して募金運動をしました。得る処五十余円にすぎず、「征露の軍捷って帰る、然れども我等は尙戦わざるを得ざりき」とあります。

明治三九年一月三日自炊寮の記念日と併せて創立一〇周年記念音楽会を開きました。此の年は募金の為に覚悟を定めて福岡、長崎で音楽会を開きましたが、総額約四百円に達しました。

明治四〇年一月には久留米で音楽会を開きましたが、当夜舞台を廻すこと二〇余回にもなったため劇場所属の大夫が舞台廻しを拒絶したので、演奏係の中津親義が縁の下に入って舞台を廻すということもありました。二月にはモットが、日本青年会事業に寄附された一〇萬円の中から花陵会に二千元を寄附し、フキッシャーも寄附を集めて、募金総額は四千三百円に達したので建築に着手することになりました。熊本県立工業学校建築科主任秋山岩吉教諭に依頼して、七月中旬に工事ははじめられました。予算確定の段階でなお、経費不足ということで会員が募金することになり、斎藤惣一が主として之に当り、フキッシャーの援助を得て、熊本市の有志を説

き遂に六百円を得て募金総額は五千九百円となりました。尚明治四一年一月二四、二五、日三年坂教会で、文芸会を開いて得た収益金と、更に不足する一一円一〇銭を、中津親義の寄附によって、建築費全部が決算済みとなっております。斎藤は四月三〇七日、東京で開かれた萬国学生青年会大会に代表として出かけ、この大会に出席していた世界的名士数人と共に、熊本に帰って、数日間に亘る運動を手伝っています。この斎藤惣一は日本バプテスト連盟に所属し、花陵会時代は殉教的な感激をもって行動しました。千反畑教会では日曜学校教師としても奉仕し、文筆に長じて寮歌なども作りました。東京帝大を卒業して五高教授となり、大正六年に日本YMCA同盟総主事となって、昭和三五年七四歳で昇天するまで、米、英、中、スイス、ハワイ等にもゆき、世界的に働いた人であります。が、この東洋での最初の世界大会（二五ヶ国からの代表一六〇名を交えた六三〇名の参加者、講師の英国エディンバラ大学教授医学博士であるサー・アレキサンダー・シンプソンの通訳を福田令寿がする）に出席した感銘を「私の一生を左右する重大な機会となった……正面にラテン語で『キリストにありて一つ』という句が掲げられてあり、讚美歌は日、英、独、中国語で印刷されたのが、各国語でうたわれた……」と書いておられます。暑中休暇中、服部定四郎は会館に残って毎日工事の監督をしました。創立記念会は開館式となり、一月二日、四日にかけて盛大に行われました。二日後二時からの開館式の司会者は総務委員の斎藤惣一、中津親義が建築についての経過を報告し、吾妻耕一（後の通信局長）が落成記念歌をつくりました。花陵会を組織してから一年目、会館建設計画をたててから八年目にして与えられた「わが城」でありました。来会者

一八〇余名とあります。またこの年は会員宮野景一が、東京帝大を卒業して五高教授として来任し、会館出身の五高教授は、二名となりました。入会会員が一四名いますが、その中に竹崎順子の孫の律次がいます。また新館建築のときは、以前から気にかかっていたブランドラム未亡人とその四人の子供たちへ、金千参百円を送ることができて、夫人から感謝状をもらい、これを伝え聞いたモットを感激させています。ブランドラムは会館の敷地購入のとき、子供等の教育費として親類から受けた四百ポンドを、そのまま立替えていたのです。彼はその半分位を寄附で集めたのですが、突然の永眠でそのままとなり、未亡人は教育費に苦労していると事でした。会員は何とか此の残金を返したく思い、ブランドラムの後任のペインターに相談したところ、休養のため帰英しようとしていた彼は、英国で寄附を募集することを快諾し、滞英二年の間に千参百円が集まったのを送った次第でした。

(5)

『花陵会三十年史』は、明治四一年以降を第三期成長時代としています。明治四一年二月九日の萬国青年会祈禱日の花陵山頭での早天祈禱会に集まった者は、花陵会員三〇名の外に蛇鶴会、医専の青年会です。二月一日には海老名と加藤直士の二人を会館に招待して晩饗会が開かれます。四月一、八日は伝道隊を組織して島原、長崎、佐賀、久留米、柳河など訪問し、各地で歓迎されました。五月二四日花陵会の上の予餞会には、遠山参良も出席し、斎藤など八名を送りました。九月二九日の歓迎会は竹崎が司会します。一月三日午後一時半から第一二回の創立記念会が開かれました。来会者は

会員二五名の外に八九名です。

明治四二年四月一日〜四日には西南部会が熊本で開かれ、講師六名、中央委員三名、長崎から鹿児島（七高）まで十あまりの会があつまり、十年前と比べてめざましい進歩でした。またこの頃から毎年五高受験生を会館に宿泊させて世話をすることが始まったのですが、この年世話した者は九名で、そのうち合格したのは二名でした。一月三日午後一時記念会が行われ、松浦五高校長も出席しました。

明治四三年は一月一五〜一六日に、青年会本部のフキッシャーが来熊し、三年坂会堂で福田令寿、岩崎教授、香山長一らと共に演説会があり、七月一〇日『花陵会会報』第一号が発行されました（第三二号が一九七五年八月一五日に出版されたあとはわからない。昭和五七年三月一日に出された会報は、四頁のもので号数の記入がない）。九月三〇日、一〇月一日の両日は、草葉町の組合教会で、会館のペンキ塗り換え費用捻出のための演芸会を開いております。一月三日の創立記念日は百に近い来賓を迎えて式を行い、模擬店を開いたり余興をしたりです。

明治四四年は、一月三日創立一五周年記念日には、早曉龍田山上に祈禱会を開き、天長節拝賀式に列したあと、記念正会をして園遊会に移り、会衆二百余名でした。四月五日の両夜は記念演説会を開き、中津親義や斉藤惣一などが弁士となって、聴衆百余名の盛況でした。

明治四五年は一月三〇日早朝に花岡山の老松の下で、熊本バンド記念祈禱会を開き、二月二五日花岡山上で萬国青年祈禱日の早天祈禱会を開きました。四月二三日から有志者は毎朝、龍田山で早天礼

拝を開始し、翌年まで継続しました。それで会員の受洗の日には龍田山で早天祈禱会を開くという例が始まり、かつてない二八名の入会がありました。五月二三日午後五時から萬日山上で創立記念夕陽会を開きました。九月一三日明治天皇大葬の日に、敬悼祈禱会を開き、一月一日〜三日山室重平と、一宮政吉を迎えて演説会や、花岡山の早天祈禱会をしました。明治四五年と大正元年がこれで終り、大正二年に移ってゆきます。

(6)

熊本大学の地続きのようにして、小道をはさんだ広い敷地に建っている廃屋の様な、いまの花陵会館であります。その生い立ちや、華やかな活躍時代を偲ぶと、無量の思いがわいてきます。有名な宣教師たちや、日本の中核となってその時代を支えた人びとの、五高時代の青春がうちこまれていたのです。熊本に第五高等中学校が設立されたのは、明治二〇年ですが、その年にはブランドラムが来熊し、二二年一月には北米YMCA学生事業主事ルーサー・D・ウィンシャードが来朝して日本各地で伝道集会を開き、熊本では海老名が通訳をして、第五高等中学校の生徒を始めとする多くの聴衆に深い感銘を与えました。ウィンシャードの指導によって同年六月二十九日〜七月一〇日に、京都同志社で学生のための第一回の夏季学校が開かれ、第五高等中学校生徒たちの活動もこの頃から徐々に動き出していたのです。二三年の二月にはハンナ・リデルが来熊して熱心に第五高等中学校の教師、生徒に伝道をはじめ、二五年八月には中央からのながれとして、阿蘇の垂玉温泉で夏季学校が開かれましたが、参加者が一二〇名余りもありました。

花陵会の最初の会員七名は、二〇年前の一八七六（明治九）年花岡山上で、奉教趣意書に署名した熊本バンドに続くものとしての、決意と友情を誓いましたが、明治二〇年代の始め頃まで、キリスト教が強い力でのびられた時代とはちがって、キリスト教徒にとって、は苦しい時期であったらうと思います。一八九〇（明治二三）年教育勅語が發布されるあたりから、キリスト教は政府から憎まれ始め、一八九一（明治二四）年内村鑑三不敬事件、明治二五年には熊本英学校の奥村事件、八代南部高等小学校と山鹿高等小学校での、キリスト教徒事件があります。また熊本県知事は、小学校教員に政党結社に加入すること、耶穌教を信じることを禁じたりしますが、教育とキリスト教との衝突をめぐる論争が展開されたりします。英学校が閉ざされて一月もたぬ明治二九年五月に持たれた、花陵会創立の会合でありました。「会館誌」は政治とこのこと、戦争のことには黙っております。明治三七、三八年の日露戦争の頃の会館誌原簿が消失しているのは、その苦しみの現われなのであります。しょうか。

また熊本の日本メソジスト三年坂教会で、洗礼を受けた熱心なキリスト教信者である田添鉄二が、明治二九年の一月には来館して、諸行事に参加していること、花陵会員もまた長崎を訪ねて交流したこと、弟の田添福太も、同じように往来していることが、『花陵会史』に出ています。けれども田添鉄二がそのご、社会主義者となって堺利彦、幸徳秋水、山川均、片山潜などと関係を持ってゆくことなどについては、黙っています。また創始者の一人である伊津野直（いまの熊本県立盲学校、聾学校の創立者である伊津野真仁太の弟）は、『花陵会史』にたびたび登場する聖公会司祭の中村亀三

郎の娘と結婚していますし、田添鉄二も鎮西学館に隣接の活水女学院の教師である中尾幸枝と結婚しています。男女交際の機会の皆無であった明治の頃の日本人には、夢の様な羨しくも素晴らしい、我国の恋愛のはしりが、他にもあったと思うのですが、このようなことにも会誌は、口をとじています。

明治時代の「花陵会館誌」を紹介いたしました。もともとたずね歩きたい思いがしきりと致しております。

天草の天主堂をたずねて

—ガルニエ神父のことなど—

—

天草の冬は、春の菜の花と、秋の野菊と、そして冬の水仙、時どきちちつく雪とが同居している。

私は、暖房のきいた車に乗って、舗装された天草西海岸を走っていた。くもり空のため藍より青くとは言えないが、けがれない海の拡がりに感激しながら、明治の終りごろ文学の旅をした人たちに思いをはせる。

明治四〇年八月九日から一〇日にかけて、新詩社の五人のんびと（五足の靴）が南国のロマンを求め、大江教会のガルニエ神父に会うために、富岡から大江まで辿った八里あまりの道は、それこそゴロゴロした山道あり、川の径あり、岩をつたい、磯辺をほうようにして進んだ道であった。途中、磯と山の間をぬう径で大きな蛇にあって、山道に迷ったり、朝から歩きつづけて、たそがれ時やっと高浜の町についている。

「高浜の町はぶどうで掩はれてゐる。家毎に棚がある、棚なき家は屋根に匍はす、それを見て南の海の島らしい感じがした。」と書いています。白秋はここで詩をかきのこした。

南の海に白鳥の

軀うかぶと港みて

舟夫らはうたふ。さりながら

「パアテルさんは何処に居る。」

葡萄の棚と無花果の

熱きくゆりに島少女

牛ひきかよふ窓のそと、

「パアテルさんは何処に居る。」

パアテルさんとは、パードレー（宣教師）のことで、ガルニエ神父を指す。

彼ら一行は高浜にとまりたいが、パアテルさんに会わねばならないので、すっかり日の沈んでしまったためたまの夜の山道を、松明をたよりに往きつ戻りつ迷いながら山を越え、夜一〇時過ぎに大江の村にたどりついた。

満員の高妙屋に無理に頼んで泊めてもらう。前日の疲れを回復するため、ゆっくり眠った彼ら五人は、いよいよ待望のパアテルさんに会いに大江の教会を目指して、また山をのぼっていった。

それから七五年を経た今は、もう高浜ではぶどうを作っている家は諏訪地区に二、三軒しかない。白みの勝った緑色のぶどうで、白ぶどうと呼ばれている。

私たちは、有名な高浜焼の白磁の急須を手ぎわよく作っているの

小柴 雅子

を見た。高浜から更に南下すると道は二手に別れる。左手を通ると山に入り、大江には早く到着するが、右手の道は、東支那海からの風と光を真正面にうけて、海中公園を見おろす道である。高浜に入るすこし前の十三仏崎に与謝野夫妻のちょっと大きすぎる歌碑がある。昭和七年にこの地に来て、晶子は、

天草の西高浜のしろき磯

江蘇省より秋風ぞふく

とスケールの大きな歌を詠んでいる。鉄幹は、

天草の十三仏のやまに見る

海の入日とむらさきの波

とやさしい。海の入日に映えて波の色が、いろんな紫色に変化するのが美しい。私も崎津あたりで入日を撮ったが、刻こくとした色の動きが見えるようだ。

なほ、途中から右下に細い道を下ると、ここは椿の原生林がつづく。今は、まああるくふくらんだ蕾が、みんな先を赤くして、暖かくなるのを一生懸命まっている、まさに島少女という感じである。このやぶ椿は花が大きく美しいのが特徴らしい。「清らかな心」と「融和」の証として、この椿が「町の花」とされている。昭和四九年二月に天然記念物として指定されたが、実から椿油をとることを今年から奨励するとのよしである。

もとの、海を見おろすカーブの多い道に上って走っていると、とつせんに「大江天主堂入口」という白い道標が、右折れしなさいと言うように目に入る。しかし道幅が狭いので、曲らずに更に進む。

道は下り坂になり、ヘアピンカーブを二つほどまがると、私たちが目的とする白い天主堂が、はるか下の方に見えた、鳥があって、森

があって、丘があって、その向うに——、ちょうど天主堂を真裏から見ていることになる。道はどんどん下りになって、いつのまにか天主堂が右上に見えるようになった。このまま進めば大江の町に入ってしまう。私たちは、また細い道を上りはじめた、五足の靴の人たちが登った道であろう。まっ白な大江の天主堂には、今日は水仙の花が一ぱいに咲いている。私たちは、その花のほのかな香りにむかえられて、だれもいない静かな御堂に入った。

六七歳とはとても思えない黒衣のシスター用沢さんが型通りの案内を話された。ステンドグラスが椿の図案なのも天草らしい。「天井から吊るされている赤いランプは、聖霊がここに居られることを意味します」というシスターの言葉にちょっとひきしまった気持ちになる。

用沢さんは、聖母訪問会という修道女会から四年前にここへ派遣されたよして、本部は鎌倉に、支部は辺地にばかり二〇ヶ所ある。もう四〇年も郷里の鹿児島には帰ったことがないとのこと、すべてを神にささげ感謝しておられる方である。

アイルランドのコロンバン会にぞくしているマクナリ神父さんは、一九七五年からここにおられる。

シスターは、「昔のことは何にも存じませんが、教会には歴史的なことが書かれたものはないにもございませんので。上の方に美頭部落という部落がございます、昔は腐頭といっておりましたそうです、三〇年ぐらい前から美頭と書くようになったと聞いております、そこの方は昔からの信者さんでいらっしやいます。昔のことは、その竹森さんという方がよく御存知です。連絡しておきますから尋ねてごらんください。」と親切に言って下さった。

神父やシスターについては、歴史よりも、今、目の前の悩める人たちのために、共に悩み、苦しみをやわらげてあげること、まい日を多忙に過しておられるのであろう。美頭部落訪問は、日を改めてということにして、天主堂を辞した。

大江の町にはいつて、高砂屋を見る。玄関横に、「五足の靴の一行この地に宿る」と小さな記念碑がおかれている。阿部知二は昭和一五年の初夏、ここに投宿して『鳥影』をかけた。また上林暁の昭和初期の作品のなかに『天草土産』があるが、五高生と、三重という少女のプラトニックな心の動きを、ここを舞台に诗情豊かに書いている。

大江から崎津までの道もまた、奇岩の点在するすばらしい風景である。

同乗の鶴田文史先生が、「私が『サンダカン八番娼館』のおサキさんと山崎朋子さんの二人連れに出合っって写真を撮ってあげたのはここですよ」、「二人がはじめて出合った食堂はここですよ」と、教えて下さると、あの人間性豊かにえがかれている老からゆきさんがとても身近く感じられる。

おサキさんは、戸籍では明治四二年生まれになっているから、幼いころ、ガルニエ神父さんと崎津で会えたはずなのに、教会には縁がなかったのだろうか。年をとってからは、軍が浦のお大師様を信仰したらしい。ちなみに、彼女は現在も健在である。

崎津の天主堂に到着した時は、もう夕ぐれに近かった。大江の天主堂は人里離れた丘に白く大きく、どこからでも見える御堂であるが、崎津の天主堂は町のなかに、尖塔だけのぞかせて、埋没している。バス停の崎津天主堂前で降りても、はじめての人には、どこに

あるのか全くわからないくらい家並みの奥にある。昔、踏絵をさせた庄屋屋敷の跡に建てられたのだそうだ。

天主堂の先はすぐ海だけれども、羊角湾に面しているので、波頭の立たない静の海である。湾を少しまわって対岸から見る天主堂の姿は実に美しかった。大江が農民のために、崎津が漁民のために、というのがよくわかる。漁から帰って来るとき、崎津の教会が見えると、きっと、信徒は今日の感謝の祈りをささげるのであろう。

天主堂のなかはず暗く、聖霊の赤いランプだけが淡いあたたか味を放っていた。庭の隅にあるジャングルジムで遊んでいた子どもに、「日曜日には教会にくるの？」ときくと、「こんよ！」「どうして？」「クリスチャンじゃなかもん！」と言いつつ。私たちの子ども頃は信者でなくても日曜学校といって、たのしんで行ったものだったのに、こんなに近くにある町のシンボルと思われる教会にこないのは何故だろうか？

すっかり日の落ちてしまった羊角湾と別れて、広くなった真っ直ぐの道を、本渡に向かってスピードをあげた。

二

そして二週間あとの日曜日に、私は大江天主堂のミサに参加した。早朝七時からのミサには、若い人が多いそうだが、九時からのミサには、老人と子どもが多かった。信者は四〇〇人で、そのうち、出稼ぎで一時的に離島している人や病気で来られない人などあって、約半分ぐらいの人がミサに集まってこられるよしである。

御堂にはいると、左側に男性が一五人位、右側に白いベールをかぶった女と子どもが二五人くらい、すでに各自お祈りをしている。

ミサがはじまると、一せいに立ったり、座ったり、ひざまづいたり、神父と若い修道士たちとシスターの無言の動きに応えて祈りの合唱をし、首をたれる。最後に、列をなして神父からの聖体拝受にあづかり、感激しつつ祈りの型のままで席にもどっていく老女の姿が非常に印象的だった。

ミサが終ってから、下田で診療所をひらいておられる何知之先生（お兄様の何英介先生は昔から大江で何医院をひらいておられる）御一家が迎えに来て下さって、美頭部落に案内して下さい。

せまい山道をスイッチバック式に上って行くと、ますます風がつめたくなってくる。川口よし子さん（何医院で看護婦をしておられた人）の家に準備されたコタツに入ってほっとしていると、伯父さまにあたる竹森猛さんがこられた。朝のミサに来ておられたあの方だった。

語り部ともいうべき竹森猛さんのお話。「私は明治四三年一二月に生まれておりますので、それ以前のこととは父の竹森織吉やその他の人たちから聞いたことで真実のほどはわかりませんが、ガルニエ神父様のことなら何でも知っています、『五足の靴』に出てきます『茂助よか水ば汲んで来なっしやれ』と神父さんが呼ばれた茂助は、本当は森口茂吉といひます。つい最近まで、今のようにシスターはおりませんで、神父さまの手助けは、信徒の若い男が順じゅんにしておりました。茂吉のつぎが私の父の竹森織吉、そして堀口為吉、弥四郎、与四郎、一男、春男となります。

昔はこのあたりは農耕地がせまく働く所がありませんでしたから、神父さまの世話をさせてもらって、ほんとうに喜んでおりました。

ガルニエ神父さまがなくなる少し前に、神父さまのくわしい履歴をききとって、一男が書いたのがこれでございますよ。」と便籤に書いたものを見せられた。天主堂に向って左側に、ルドビゴ・Fr・ガルニエ神父記念碑の胸像が、昭和四六年に建てられているが、その側面に刻み込んである履歴は、堀口一男氏のきき書きの便籤によるとのことである。

ガルニエ神父は、フランスのミッシヨン会にぞくし、一八八五（明治一八）年にはじめて神戸に上陸してから、京都に一年、一八八六年十二月末から長崎県西彼杵郡伊王島、南松浦郡中通島魚の目、有川、奈良尾、青方、そして一八九二（明治二五）年に大江に来て、崎津と兼任で布教する。一九二八年からは、崎津に専任のハルブ神父で来たので、大江の専任司祭となり、一九四二（昭和一七）年一月一九日に、肺炎のためこの地で永眠する。大江での生活五〇年であった。

九州の辺地ばかりを歩いて来たのは、それぞれの地に、潜伏キリシタンがいたためである。禁教令による迫害のため、秘密裡に自分たちだけで教えを伝えているうちに、次第に形の変わったキリスト教になってしまっていたものを真のキリスト教にもどすために力をつくしたのだと思う。

「ガルニエ神父さまは、ほんとうに質素な生活をなさいましたよ、麦飯や芋をたべ、他家からもらった衣類は困っている人たちにあげてしまわれ、御自分は古い物をいつまでも大事に着て居られました。靴は履かれず地下足袋でした。スータン（黒衣）は短いのです、何故かという、すり切れてくると切り取って折って縫う、またすり切れると切り取るしてだんだん短くなったのですよ。昔の

教会堂は狭くて神父さまの部屋は、小さな一部屋しかとれませんでしたので、寝るのも、勉強するのも、食事をされるのも、人と応接するのも、ミサの着がえも、何もかもそこでしておられました。無駄遣いをするのを大変いましめられ、そうしてためたお金と、自分がフランスから持ってこられた全財産を投じて今のあの大きな教会を建てられたのですから。

福岡の司教様から送ってくるのは食費だけでした。教会を建てる時も、司教からは、いまの大江中学校がある近くに建てるようにと指示されたのですが、神父さまは、『信者の多い此処に建てねば』と反対されたので、司教からの援助金がなかったのですよ。でも神父さまは、みんなからお父さまのように慕われておられましたから、お金を出し会う人、力を出し合う人たちが集まって、一九三三（昭和八）年一月に完成させました、着工から八ヶ月かかりました。工事に働いた人に詳しくききましたら、聖堂本体と祭壇、裏のコンクリート工事合計二万円かかったそうです。」

何知之先生も次のように話された。

「大正時代にはまだ残っていたキリスト教信者への差別意識は、ガルニエ神父さんの人格の高さがあったからこそ、なくなったのだと思います。」

「あぶなくなった病人さんには、同時に医者と神父さん呼びます。神父さんと病人と二人だけになって懺悔をさせられるのです。今まで苦しんでいた病人が、たいへん安らかな気持ちになれて臨終をむかえることが出来るのですね。また、懺悔しているうちに病状が次第によくなり快方に向っていった人もいましたよ。」

竹森さんはまた、

「もっと昔の話をしますと、禁教の時代は、大江は長崎ほどひどい仕打ちはなかったようですが、無理やりに改宗させられ、大庄屋（松浦家）に正月集められて踏絵をさせられたのですね。それでもひそかに、木こりの姿をして山に入り、見張りをつけて、お祈りをする処を作っていたそうで、今そこに塚がたてられ、蘇鉄の木が植えられています。踏絵を踏むことが出来なかった人は殺されたのですが、その亡骸は山に埋めて、墓はたてられないので、やはりそつと蘇鉄を植えたらしいですね。」

「明治六年に禁教令がとかれると、あちこちにあった高札はとり除かれましたが、まだまだ改宗するのはむづかしいことでしたらう。三年程たって道田嘉吉さんを先頭に、堂々と礼拝する人が出て来ました。この信者たちは御堂を、今は『古寺さま』と呼ばれているところ（何医院のむかいの丘）に建てたそうです。そこには、土台石六ヶが残っていて蘇鉄が茂っています。」

明治一二年に、長崎司教の命で、コール神父が三回も、キリシタン調査に来られました。

迫害前は、九〇〇戸のうち八三〇戸が信者だったのですが、調査の結果は四〇戸だったそうです。

明治一三年にはボンネ神父、一四年にはフェリエ神父が来られました。フェリエ神父のとき、昭和一六年に、大江の七人衆とよばれる元潜伏キリシタンだった人びとが、それぞれの特技を生かして、左官、大工、木曳、石かきなど協力して教会堂を建てました。場所は、現在の司祭館の建っているところです。

その人たちは、長尾友二郎、白木胤蔵、小堀田太郎、井戸下甚太郎、鶴山寛一、道田嘉吉、鶴山鶴松でした。

また、フェリエ神父は、天草ではじめての孤児院を、大江の東側の台地の根引というところに作り『子部屋』と名づけました。なんであんな不便な台地に？と思うでしょうが、崎津からも河浦からも大江からも高浜からも同じく、らしい距離にあるところをえらんだのです。ガルニエ神父が、二五年にこられたときには廢止寸前だったので、また一生懸命に復興させ、不幸な孤児や障害児を集めて、行き届いた救済をされました。一時は子ども数かふえて収容しきれなくなり民家にあずけられたこともありましたが、明治四〇年ごろまでつづいていましたようです。

ガルニエ神父さまは、五〇年も居続けて下さいましたから、もう村のことは何でもよく御存知で、そして信者であるなしかかわらず親身に話を聞いてあげられましたから、子どもから、おとなとよりまで、みんな、お父さんのように信頼しておりました。

その後にくられたベニエ神父さんは、あまりにもカトリックの教理を、フランスでの風習通り強く押しつけられたために、棄教した人もいました。またその人が亡くなったときのお葬式に参加した信者を、棄教した人の葬式に参加するのは教理に反するといって破門されましたが、ちょっとまずかったと思います。ベニエ神父さんは、昭和二〇年四月から、軍部によって、阿蘇の方に収容されておられました。」

九州の神父たちが、軍部によって強制収容されていたところは、南阿蘇の栃木温泉にある小山旅館である。四〇人あまりの神父が四月から八月まで、八、九人の憲兵に監視されていたのである。栃木温泉は、国道五七号線の立野を過ぎてから右折れる道を走ると、いったん河底まで下り、橋を渡って戸下温泉を過ぎて、またあがっ

たところにある。小山旅館は、駐車場で車から降りて、こんどは徒歩で急な坂道や段を川底まで下らねばならない。四方を山と滝でかこまれ、風景は美しいが、自然の牢獄というかんじである。一階に祭壇をつくり、二階で生活し、三階の見張りしやすい部屋に憲兵がいたということである。日本人のシスターが、三、四人で食事の世話をしていた。

「戦後は、日本人の牧山神父さんもおられましたし、オードワイヤー、カヘリー、クレリー、ホーガン、ドイル、スカリー、デワイン、グリフィン神父さんなどがおられましたが、みんな短期間でございました、今のマクナリー神父さまは、もう七年になられますから長いですね。」

竹森さんは、小学校四年のころ、氏神様のお祭りに（大江八幡宮、祭神応神天皇）生徒みんなが参拝させられたが、神として拝むことを拒否したそうである。また、兵隊検査のとき、一ヶ村の若者が牛深に集められ、天皇を現人神として礼拝することを強要されたとき、「天皇は神にあらず、デウスこそ唯一絶対の神である」と検査官たちの前で自信をもってとうとうと信念をのべたという。村長や兵事係の人たちは蒼くなつてふるえていたが、あまりにも理路整然とした話しぶりに、大隊長の田村陸軍大佐も何も云わなかったとのことである。昭和六年の軍国主義に入りはじめたころのことであった。竹森勇神父、竹森道神父、川口清神父、川口康頼神父を親族にもっている竹森翁の若いころの確固たる信仰がうかがわれる話であった。

いろいろ御指導下さいました鶴田文史先生、何知之先生、松浦正嗣先生、竹森猛様、川口よし子様、深く感謝申し上げます。

母たち(7)



R・S・プリフォ
訳・石原通子

よくあることだが、もしも数人の妻があるならば、妻たちはふつうは姉妹たちであるが、もしも一人の妻が別の家族のものであるならば、その妻もまたじぶんじんの家にとどまり、夫はじぶんの時間それぞれに妻たちの家に配分する。けれども、もしも第二妻が良い状態になく安楽な家をもたないならば、第一妻が第二妻を呼んで、夫やじぶんの姉妹たちとともに、じぶんの家を共有するという取りきめがなされることもある。

インドのアッサムの高地地方では、放浪生活と三度にわたる征服の太鼓によって苦しめられなかったさまざまな部族があり、今日までも原始的な社会組織を保有していて、今なお、ブリタニアのメンヒルのような巨大な立石を死者のうえにたてる。そのシンテグ族の世帯のなかで、家族の祖母あるいは時には曾祖母にあたる老婆が、その曾孫たちや曾祖孫たちと一緒にいるのを、あなたはみいだすであろう。だが娘たちの夫たちは、そこにはいない。彼らは妻たちを夜にたずねるだけであり、彼らは「ウ・シオン・ハア」すなわち「子を生ませるものたち」としてしられている。カアシー族のあいだでは、「夫はその花嫁をじぶんの家へつれていかないで、彼女の家にはいりこむか、ときどきたずねる。彼は、その妻がぞくしている家族を継続するためにうけいられるだけのようである」。いくつかのカアシー部族では、夫たちは妻たちのもとにその住居をさだ

め、妻たちはその母たちや祖母たちとおなじ屋根のしたにとどまっている。家族の祖先であり、その守護の女神である「祖母」と區別するために、祖母は「若い祖母」とよばれている。すべての男の所得は、婚姻以前には彼の母にぞくし、婚姻のあとでは彼の所得は妻の家族にぞくする。財産は母から娘へ伝えられるが、不思議なことには、最大の分けまえを、そしてある部族では所有地の全部を得るのは、長女ではなくて末娘である。このように、それらの人びとの社会的諸単位を構成している母系氏族は、「マハリ」すなわち「母集団」とよばれている。「彼らの社会組織は、論理的で完全な方法で実行されているところの、なおも残存している母系制度のもっとも完全な実例の一つをしめしているが、これは父の地位と權威とを社会の基礎とみなすことにならされた人びとにとっては、まことに注目すべきことである。シンテグ州の高地地方のもっとも原始的な諸地域では、母が家族の長で根源であり、家族結合のきずなであるばかりでなく、母が財産の唯一の真の所有者であり、そして彼女とおしてだけ相続財産がつたえられる。父は、母の氏族にぞくする彼の子どもたちと血族関係をもたない。死者の記憶を不朽にするために彼らが建てた扁平な記念石は、その氏族を代表する女の名にちなんでよばれ、そして記念石のうしろに配列された立石は母かたの男の血族者にささげられている」とチャールス・ライアル卿はの

べている。

これとおなじ組織は、その地方の他の諸部族のあいだでもみられる。たとえばガロー族のあいだでは、「女が優勢な地位を占めているのがみられる。夫は妻の母の家族のなかにはいり、子どもたちは母の氏族にぞくし、父の氏族にはぞくさない。すべての財産は女をとおしてつたえられ、男たちは彼らじしんの権利のある相続はできない」。夫は妻の親たちの家に妻とともに住居をさだめる。カーン

ーおよびジャンティア高地の別の部族であるラリング族のあいだでは、「婚姻についてのふつうの慣習は、娘の親たちが彼女のために夫をみつけ、彼をじぶんたちの家族の一員としてじぶんたちの家へつれてくる。このような婚姻から生まれた子どもは母の氏族のなかにはいる」。コチ族のあいだでは、「男たちは非常に勇敢で、全財産を女たちにゆずった。女たちは、そのかわりに織物、紡績、醸造、耕作、裁縫に、きわめて勤勉である。ようするに彼女たちの体力でできるあらゆる仕事をする。女が死んだとき、家族の財産はその娘たちにつたえられる。そして、男が婚姻するときには、その妻の母とともに住み、この妻の母と妻に服従する。

南インドのマラバル海岸地方では、有名なナヤール族たちは土着のタミール住民のなかで貴族階層を構成している。彼らのあいだでは、夫とともに彼女の住居をさだめるために、じぶんの家をはなれるような女はいまだかつていない。この家族集団すなわち氏族、いわゆる「タルワド」または「母集団」は、「一人の共通の女祖先の女系のすべての子孫から」構成されている。世帯は母とその子どもたち、兄弟姉妹たちによって構成されており、夫はその要員ではない。もっとも厳格な意味では夫たちは訪問者にすぎなくて、この

地位ははっきりとみとめられていて、ナヤール族の夫はその妻の家では、けっして食物をともしないし、その家の一員ではなくて、夕食のあとの訪問をつねとした。現在でも妻方居住婚の基本的規律はまもりつづけていて、「旧家や貴族の家では、今なお彼らの娘を家からだすことをことわっている」。南マラバルや北トラパンコールのいたるところで、婚姻のあと女が夫の家にうつることは例外である。

前述の考察されたいいくつかの事例では、婚姻は永久的に妻方居住婚的であるのではないが、婚姻のあと女はじぶんじしんの家にあいかわらず居住し、数カ月または数年のあいだは彼女の家族とともに夫が住むことを変えるのはゆるされない。ときにはこのような弱められた妻方居住婚的慣習は、たんに儀式的なものに退化している。このようにマライ半島のパタニ諸州では、若い夫妻にとつてその婚姻生活の最初の二週間を妻の家で過ごすのが義務である。妻の母の家族のなかに妻の永久的な住居があるというのが、マライ族の本来の規律であったので、婚姻のあと二週間だけとどまるという義務は、より古い慣習の儀式的遺風とみなされるだけである。これとおなじ慣習が他のところで、たとえばコーチシナのカドゥパタン族のあいだでみられるが、それはおなじような本来の慣行からでたものと推定される。また、妻方居住婚がかつてはふつうであった地方であるローデシアのバイラ族のあいだでは、今では新婚の夫妻が婚礼の夜は花婿の家で過ごすことになっているが、その翌日は妻の家へおもむき、花婿がその妻の前の地面に槍を投げる儀式をおこなってから、彼らはそこに二晩とまる。ナイジェリアのカゴロ族のあいだでは、花嫁と花婿は彼らの婚礼の夜だけを、花嫁の親たちの家です

ごす。おなじ風習は、ダルディスタンのいくつかの諸部族によってきびしくまもられている。しかし他の諸部族では、花嫁の家での若い夫妻の慣例的な滞在は数カ月におよんでいる。妻方居住婚の諸慣習のもっと退化した形態は、南インドのいくつかの諸部族のあいだでみいだされるようである。マラバールのマツペラ族のあいだでは、花嫁と花婿は結婚式のと、「しばらくの間」、花嫁の家の一室にいっしょにとじこめられる。婚姻は床入りとみられているが、じっさいのところ、この慣習はまったく儀式的なものである。ウェンド族のあいだでは、花婿は婚礼の夜を花嫁の家ですごすが、そうするまえに、彼はその家族に必要な儀式はつた別れをする。人類社会のそのほかの多くの原始諸制度とおなじように、退化した妻方居住婚の遺風は、花嫁の家で婚礼の食事をともにする慣習のようになわれわれじしんの慣習のなかにのこっている。このように花婿はその婚姻生活をその妻の家族の客としてはじめるのである。

これらの事例では、妻方居住婚の慣習の痕跡は空虚な儀式的慣行にすぎなくて、なんら実目的に奉仕せず、感傷的な価値をもつだけである。そのほかの例では、そのうちのいくつかをすでにのべたが、妻を夫の家にうつす慣習は、夫妻が夫の家と妻の家にそれぞれ交互に居住するか、あるいは花嫁がじぶんじしんの家に短い期間か長い期間もどるか、しばしば彼女の家族を相当長い期間おとずれるかによって緩和される。妻をその夫の家にうつす慣習は、あきらかにこれらの場合には主要な原則の成果ではないし、まだこのようなものとして完全に確立されてはいない。アフリカの多くの地方では、そのほかの非文化諸社会におけるとおなじく、妻が夫の家へ連れてこられるばあいでも、彼女じしんの家族とのむすびつきは、進

歩した父権的諸社会における規律よりも、はるかに密接である。バケレヴェ族について、「よい理解と、婚姻の安定にとつて非常に有害である慣習は、女たちがそうたびたびではないとしても、彼らの家族のもとへかえっていくという習慣である。もしも女がきげんを悪くすると、女は『家にかえりたい』という。もしも彼女の親族によって祝宴がひらかれると、彼女は『家にかえりたい』という。そして、これらの滞在がしばしば非常に長びくので、一人のこされたかわいそうな夫は気をくさらせる。だが彼は事態をかえるには力はなく、それは一つの風潮である」と、ある宣教師はのべている。

そのほかの多くの事例では、数カ月または数年の期間をかきつての部分的な妻方居住婚は、あとでは妻をその親たちの家から、花婿の家へうつすことがゆるされるというので一定期間奉仕するという「奉仕婚」と称されているものと、ほとんど区別できない。すべての妻方居住婚は、ある意味では「奉仕婚」である。というのは、妻の家族との夫のむすびつきは、ふつう彼らを扶養するための彼の労働提供に条件づけられており、彼の妻たちの親族者たちのために、もし機会があれば彼じしんの親族者とも戦うことに条件づけられている。そしてその結合は、ただそれらの義務を履行するかぎりつづるのである。「売買婚」とむすびついていて、そのような支払いのかわりに一定期間の奉仕が提供されるわりと数すくない事例では、奉仕婚の慣行は、原始社会の諸制度に関係のない諸条件と諸取引にたいするもっと古い諸慣習の適合であることはあきらかである。これは永続的な妻方居住婚がいまお慣習であるか、あるいは以前にはふつうの慣習としていられたところをのぞいては、どこにもみいだされない。カアシー族、ガロ族、コチ族のあいだでのよう

に、たとえば妻方居住婚だけでなく、もっとも完全な母権的社會組織がおこなわれているアッサムの諸部族に於いて、婚姻にさいして花嫁代償をいまま支払っているボド族とディマル族のあいだでは、「この金額を支払う財産のない若者は、その義父の家に行くことをえらび、文字通り彼の額に汗することによって妻を得なければならず、平均して二年から五年、はなはだしいときは七年にもおよぶ年限のあいだ、どうにか食事するだけの『も』とユダヤ人的『労働』をする。この慣習はボド族によってはガボイとよばれ、ディマル族によってガールジャとよばれている」といわれている。これら諸部族の慣習は、それらの隣人たちや同族者たちであるコチ族、ガロ族そしてカアシー族の一般的で永続的な妻方居住婚的諸慣習とは、その起原では関係がないとかんがえることはむずかしい。おなじように、インドシナのある地域から報告された「奉仕婚」のおなじ慣習をみいだし、マライ族あるいはアフリカでも花婿が花嫁代償を支払うかわりに奉仕によって彼の妻を得るとのべられているとき、インドシナ族、マライ族、パントゥ族の一般的な妻方居住婚的慣習と無関係であると、ほとんど考えることはできない。花婿によってなされる「奉仕」は、花婿代償の支払いをすかさないかの随意によるものではないのがきわめてふつうであって、たとえ彼がじゅうぶんに支払いをする力をもっているとしても、奉仕は強制的なものである。それどころか、あるばあいには「奉仕」が支払いの形式としてみなされないで、妻とその子どもたちをそれらの家から移すという要求もやめるといふことで、妻の親たちによって夫じしんに支払われる。すこしも変更をうけていないで永続的であるときさえも、妻方居住婚は老練な觀察者たちによって、「花嫁を得るための

奉仕」として、しばしばまちがったのべられている。たとえば聖書にでてくるヤコブの婚姻についての先例を、彼らの心のなかにもっている北アメリカのジュスイット派の宣教師たちは、インディアン婚姻諸慣習を奉仕婚としばしば表現している。彼らの諸報告は、そのほかの点におけるとおなじように、この点についても矛盾と対立の諸記事にみちている。ある者たちは、インディアンたちはその妻たちのために、「一年間」または「第一子が生まれるまで」奉仕すると、われわれにはっきりとのべている。だが、それらの諸報告のくいちがいと、明白な諸記事の形態——そのうちのいくつかを、わたしは引用した——から、それらの記述が誤解にもついているということを経易にすることができる。夫と妻の家族とのあいだの関係は、子どもの出産のあとでおわるどころか、かえって、このできごとのおとで強められ、じっさいにはじまるだけである。その他の多くの諸部族とおなじように、イロクォイ族をしていた旅行家のヘンリーは、女はその母が死んだあととけつしてその親たちの家をはなれないと、くわしくのべている。「家」がたんに皮テントでできているところでは、家族がふえると便宜上からして、別個の円錐形小屋の建設にふつうなるであろうことは、たやすく理解することができる。だが、これは社会集団の構成にけつして影響をあたえないが、なんらかの事情で女が夫の氏族にくわわるために、彼女の氏族をさつたという証拠はない。なおまた、数年のあと夫はじぶんの家にその妻を移すといわれている多くの事例では、これは彼女を彼じしんの親族のなかへつれていくことを必ずしも意味するものではなくて、家族の増大のために、しばしば彼女の親の家に隣接して別個の住居をたてるのが便利であったからである。北アメリカ・イ

ンディアンの諸慣習と古代ヘブライ人の諸慣習とのあいだの類似をみいだした宣教師たちをして、前者の婚姻諸慣習にたいするまぢがった見解を生みださせたヤコブの婚姻についての類似は、夫がその妻をつれていく権利をあたえる支払いを奉仕によって代替するという例ではない。これに反してこの聖書の物語は、ヤコブが二〇年間働いたあとでさえ、彼がそのようななんらかの権利をもつことを、ヤコブの義父がまったく拒絶したことを、はっきりとわれわれに物語っている。

雌によって居住場所が決定されることは、生理的諸事実の自然の結果であり、動物のあいだの規律であることを、われわれはみた。その仔をそだてるための適当なねぐら、または隠れ場所をえらぶのは雌であつて雄ではない。そして、雄はそれらの必要条件にじぶんを適応させ、雌と結合するときには彼女をその棲家にたずねる。すべての動物は性的結合をするかぎり、それらの習性では妻方居住婚的であるといえる。したがつて、原始人類の習慣もおなじであつたと推定するのが自然である。この推論が正しいということは、例外的ない社会的事実によつて証明されている。男がその妻を彼女の家からうつして、彼じしんの家へつれてくるときはいつでも、このような移行が女の家族によつて是認されるために、手続きはかならず契約か示談をとまなう。その承認は、いくつかの最高度の文化段階をのぞいて、あらゆるばあいには補償あるいは報酬を彼らにあたえることによつて得られる。別の女はたぶん交換によつてあたえられるが、もっと一般的にはなんらかの形式の支払いがなされ、女を移す許可がそれにもとづいている。このような取り引きが、どれほど簡単なものであつても、ある程度の文化発達と社会組織を仮定するの

である。このような法律的または商業的な手続きが、どの動物種類にもあるということは問題の外であらう。だが出現した人類が動物とほとんどちがつておらず、そのような取りきめの交渉がひとしきりできなかった時代があつたにちがいない。他方では、妻を他の家に入つすことを妻の家族によつて承認されたあらゆる契約あるいは取りきめは、男がこのような権利をもたなかつたもつと原始的な時代の慣習の代替物である。その権利は法律上と商業上の契約の発達と、男の購買力の発達によつてもたらされた。たとえばインドネシアでは、妻方居住婚が本来の原始的な慣習であることを、われわれはみてきた。セラム地方のアルフェール族のあいだでは、男はその妻を支払いなしに娶り、彼女の部落のなかに彼の住居をさだめるか、あるいは花嫁代償を支払つて妻を彼じしんの部落へうつすかの選択権をもっている。もしも彼がおなじ部落の女と婚姻するならば、支払いの問題はないのである。おなじように、ケイ諸島では花嫁代償の支払い、イスラム教によつてもたらされた最近の刷新であり、これによつて男はその妻と子どもたちをじぶんの家へうつす権利があたえられる。もしも花嫁代償が支払われないならば、彼の婚姻にたとえ障害がなくても、女はじぶんの家にとどまり、子どもたちは彼女の家族の成員たちとみなされる。おなじ諸状態がブルー地方のアルフェール族のあいだでおこなわれている。このように、妻方居住婚形態は男がその妻方の人びとと住むためにでかけるという本来のやり方にくわえられた取りきめにもとづいている。もしもそうであるならば、また動物状態から抜けだした初期人類が、性的結合をむすぶための念入りの商業上の取り引きを、ただちにむすびはじめたと推定することができないならば、妻方居住婚の慣行が婚

姻結合の本来の型であったし、人類起原と同時代のものであると結

第五章 母系氏族

妻方居住婚の慣習はめずらしい慣行ではない。妻方居住婚の実行が、家族と社会関係との家父長的形態とよばれるものを構成している——社会組織のその他の諸特徴——それらが一緒になってむすびついているのおなじように、妻方居住婚の実行は、これらの家父長的に組織された社会におこなわれている諸特徴とはちがっている。照応する諸特徴や諸慣行とむすびついてみいだされる。一家族の女たちが世代から世代へとともにくらし、そして彼女たちの数人の性的配偶者たちが別の社会集団にぞくしているときは、その家族の構成せたいは、それぞれの夫たちの家へ女たちをうつすようにきめられた慣行からおこなる家族の構成とは、はっきりとちがっている。もし妻方居住婚が人類社会のより初期の諸形態において普遍的な実行であったならば、後者のありかたからおこなる家父長的家族が、社会組織が発達した中核であるとはされえないのである。

妻方居住婚のほとんどの事例では、夫はその妻の家族の扶養と保護のために奉仕することを期待されているとはいえ、これらの役目は母系的家族の生存にとってかくことのできないものではない。彼らはその家族のなかの男成員たちによって、すでに扶養されている。だから夫の奉仕はその妻と子どもたちにあたえられるのではない。彼が扶養し、たすけるのは「彼の」家族ではなくて、彼の妻の家族である。たとえば、北アメリカ・インディアンのあいだでは、

論するほかはないのである。

夫が狩猟のえものを全部その妻に手わたすのが、ふだんの慣行である。それだから妻はそのえものの大部分を彼女じしんの親族者たちのあいだに分配する。彼女はわずかな部分を夫のためにとっておくかもしれないが、彼女はそうすることを義務づけられてはいない。もし彼女がそうしなかったとしても、夫は抗議する資格がないが、彼の必要とするわけまえを彼じしんの親族者たちから手にいれ、彼の食事はその姉妹たちの一人によってこしらえられるのであった。おなじように彼の子どもたちは、けって父にやしなわれないで、彼らの母の氏族にぞくし、食事をあたえることや、もし保護を必要とするならば、母じしんの兄弟たちの仕事である。それだから、家父長的家族がもついていた経済諸関係は、婚姻が純粹に妻方居住婚的であるところでは存在しない。男女の分業の経済的必要は、性相手たちのあいだでのどんな結合とも無関係に、母系家族のなかで遂行されている。家父長的家族のなかで夫や父によってはたされ、彼をその家族の働き手または保護者として指定するところの諸機能は、母系集団では妻の兄弟たちによって遂行される。「兄弟」という言葉、サンスクリット語の「ブラートル」は、「扶養する」を意味する語根からでている。兄弟はその姉妹とその姉妹の家族の本来の扶養者であり保護者である。

妻の長兄、子どもたちの伯父の地位は、原始社会のよく知られて

いて、ひろくおこなわれている特徴である。そして基礎的なものもあり、その特徴をうみだした固有の組織がしばしば残存している。

北アメリカでは、「インディアン社会での伯父の血族関係は、いくつかの特徴ではほかのどんなものよりも重要である。甥たちや姪たちにたいして彼にさすけられている權威による。じっさいには、彼はその姉妹の夫よりも、むしろ姉妹の家族の長である。たとえば、チャクタ族のあいだでは、少年を学校へだすばあいは、父のかわりに伯父が彼のためにその任務をひきうけ、諸準備をする。また、ウインネバゴ族のあいだでは伯父は甥の奉仕を要求したり、こらしめをあたえたりするが、甥じしんの父は要求したり、こらしめをこころみたりしない。アイオワ族やオッタワ族でもおなじように、伯父はその甥の馬や鉄砲やその他の個人的な所有物を、じぶんじしんで使用するために勝手に取ることができるのであるが、甥じしんの父はそんなことをする権利をみとめられていない」。アメリカ大陸の南部地方においても、おなじような関係がおこなわれている。ゴアデロー族のあいだでは、「父はその娘をかたづけられることはできない。そのような権利は母の兄弟たちにぞくしている。これらの伯父たちは、ゴアデロー族の法律によって、子どもたちの本来の保護者たちまたは真の父たちとみなされている。」アフリカ大陸のさまざまな地方では、母の兄弟の地位は大西洋のむこう側でとおなじ特徴をもっている。だからたとえば、東アフリカのワムリマ族のあいだでは、母かたの伯父はその姉妹の子どもに、「親たちでさえも干渉することができないほどの破棄できない権利によって」、あらゆる權威をふるうのである。バレー族のあいだでは、妻はその兄弟に服従して、その夫には服従しない。彼女は前者に助力や忠告を懇請

して、後者にはしない。コンゴのバワナ族のあいだでは、ある男の子どもたちが思春期にたつするやいなや、母の兄弟によって監督される。父は子どもたちになんの權威ももたない。あるいはまた、西アフリカのイガルワ族のあいだでは、「子どもたちにたいする父の責任と權威は、きわめてうすい。実際に責任をもっている男親族者は母の兄である。息子も娘も婚姻する許可を彼からえなければならぬ。娘の婚姻に必要とされる贈物は、伯父と母にさしださねばならない。そして、もし母が死ぬようなばあいは、父にはなくてはならない。子どもたちを養育する責任がある。子どもたちは伯父の家にいく。そして伯父は彼らをじぶんの子どもたちよりもいっそう親密にかわいがって大切にとりあつかう。そして伯父が死ぬと、彼らがその相続人となる」。ヴェニアミーノフによると、アレウト族のあいだでは、父はその妻の子どもたちを養育しようにもなにももたない。その姉妹の息子と娘を世話し、そだてたのは彼女の兄弟であった。メラネシアでは、「土着の慣習によると、もっとも親密な血族関係は姉妹の息子とその母の兄弟とのあいだである。なぜならば、血族関係をつたえる母は、男があたえることができるような奉仕をあたえることができないからである。たとえばある男が子どもたちに父の役割をするとしても、その男の息子たちはその男じしんの血族者ではない。しかし彼の姉妹の子どもたちと彼じしんのあいだのきずなは、母とおしての血族関係の強さであるあらゆる土着社会の伝統的なむすびつきの強さをもっている。若者が社会的きずなを気づきはじめると、その母の兄弟を彼の血族のなかの男の代表者としてみとめる。甥があらゆる種類の助力をその母の兄弟に期待し、伯父はその姉妹の息子を特別の配慮をもって世話するのは当然で

ある。この関係の親密さは基本的である」。母の兄弟は、「メラネシアの家族では首長の地位をしめていて、子どもの親たちは、伯父のまえではめだたなくなる。子どもたちは父にも母にもぞくさくないで、母の兄弟、あるいは母のもっともちかい血族の男にぞくする。母方の伯父はその甥たちや姪たちをかたずける全権をもっている。子どもたちが大きくなると、彼らはその父や母からはなれて、『マトゥアナ』のところへいく。彼らはその家にすみ、そのためにはたらく。彼らはマトゥアナとよい関係にたつことを、目的のすべてとしている。というのは、彼らはすべてを彼に期待し、彼に依存しているからである。マトゥアナの死にさいして、その相続人としてすすみでるのは彼じしんの子どもたちではなく、その甥たちである」と、別の著述家はのべている。メラネシアでの母の兄弟の権威は、「わたしたちのあいだでの父の権威ときわめてにてはいるが、かならずしもおなじではない。第一に、伯父の影響力は、ヨーロッパでの父の影響力よりもずっとあとまでも、子どもの生活のなかにもちこまれている。それからまた、彼はけっして家族生活の親密さのなかへははいらない。……こうして彼の力はおくからはたらいて、もっともやっかいな、ちいさい諸事件にまではきびしくなれないのである」と、マリノウスキー教授は報告している。この伯父の権威は、家族のことにたいしてよりも、部族の問題について関係がある。ほとんどの野蛮人たちとおなじように、メラネシア族は、男祖先は父方ではなくて、伯父方のそれを、当然かんがえている。そして、メラネシア族やアメリカ・インディアンは、けっして「わたしたちの父たち」とはいわないで、「わたしたちの伯父たち」というのである。一人のメラネシア族の改宗者が仲間の上着民の教化をて

つだうために宣教師団にやとわれて、彼が仲間たちに主の祈りを翻訳したとき、彼は「天にましますわれらの父」とはいわないで、「天にましますわれらの伯父」といったのである。メラネシアの大部分とトロブリアンド諸島——その社会学はマリノウスキー教授によってみごとに研究されている——の婚姻は夫方居住婚である。これらの社会のなかで母方の伯父によってしめられている地位は、妻方居住婚の慣行がなおこなわれていた時代からのこされたなごりであらう。

妻方居住婚の慣習がおこなわれているたいいの社会では、妻の家族にくわる夫は、妻の兄弟の権威よりも妻の母の権威のもとにある。非文明社会でのある男とその義母とのあいだの関係を支配する諸規律は、わたしたちにとってはきわめて奇怪であつて、ほほえみなしにそれらを考えることがほとんどできない。だが、その妻の母にたいする野蛮人のひろくしられた態度は、彼にとつてはわらうどころのことではない。男がその妻の母に話しかけてはならないし、ほとんど彼女をみあげることさえしてはならないのが、野蛮の社会では、もっともかわらない規律のひとつである。そして、この規律の侵害は近親相姦を禁止する規律の侵害とおなじほどの恐怖をもつてみられている。わずかな実例は、このような感情と伝統の特徴をよびもどすためにやくだつてあらう。

オーストラリアの北部の諸部族のあいだでは、男はその義母がかつくことを、うなり板の音によってしらされる。そして、ある土着民は彼が横になってねむっているとき、その義母の影が彼の足にあたったために、ほとんど死ぬほどにおどろいたということである。「昔は、男がその義母と話すことは死であつた。けれども後代

では、このにくむべき罪をおかしたあわれなものは、生きていてよかつたが、彼はきびしく非難されてキャンプから追放された。タスマニアでは、もっと若い男がじぶんの妻にはらっていた関心を懸念する土着民が、その生まれたばかりの娘とこの競争者と婚約させる計画をおもいついた。そのときからこの男にとってその未来の義母をみることさえ、まったくできなくなつた。ニュー・ブリテンでは、「男はその義母と話しをしてはならない。彼は彼女に話しかけてはいけなだけでなく、彼女のとおる道をさげねばならない。もし彼が彼女にとつぜんであつたら、彼はどこかへかくれなければならない。またもし彼が体をかくす余裕がないときには、彼は顔をかくさねばならない。ある男が、その義母とおもいがけなく話すことから、どんな災難がおこるかば、そぼくな想像力でかんがえうる以上のものであろう。一方のもの、または双方のものの自殺が、おそらく唯一の道であるようである」。バンクス諸島では、「はじめの歩行者の足あとを潮が砂浜からあらひおとしてしまわないうちは、その浜づたいに、男はその義母のあとについていけないであろうし、義母も彼のあとをついていけない」。宣教師ファン・ハッセルトは、彼が土着民の子どものための学校で指導していたニューギニアのドレーで、六才くらいのちいさな男の子が、授業中にいきなり「木の丸太のように」床にたおれて、机の下にかくれてしまつた、とかたっている。彼がその兄弟の義母が学校のまえをとおりすぎるのをみかけたからである、ということがわかつた。アフリカでは、この規律はオーストラリアやメラネシアでとおなじようにきびしいのである。たとえば、マサイ族のあいだでは、もし男が、「その義母の小屋にはいると、彼女はさらに奥の間にひっこみ、彼が外

の間にはいるあいだはベッドの上にすわっている。このように、はなれて彼らはおたがいに話をしなければならぬ」。けれども、一般的には、男とその義母とのあいだでの、すべての会話がきびしく禁じられていて、彼らはおたがいをみてはいけないが、ぐうぜんにであつたときにはじぶんの顔をかくすのである。ある宣教師が、オバヘレロ族のあいだで、かつて宗教上の大きな会合をひらいたことがあつたが、その会合には首長と多くの人びとが参列した。そのなかに首長の将来の義理の息子もいた。花嫁の母がその会合に姿をあらわしたということが、ふいにおこつた。にわかになその若者はうつぶせにたおれた。そして数人の心配した友人たちはいそいでじゅうたんや毛皮を完全に彼にかぶせた。彼はその会合の進行中、終りの儀式で夫人の退去が、彼をついに解放するまで、汗をかいてほとんど窒息しそつになつてよこたわつていた。コンバーのバホロ族のあいだでは、男の義母にたいする礼儀的な忌避は、その妻の死後でさえもまもられている。ユーカタン半島のインディアンは、もし男がその義母とであれば、彼は子どもをこしらへることができないとしんじていた。北アメリカでは、「これよりもっと根づよい彼らの慣習はないし、もっと拘束的な家族法はない」。

女性史研究 第15集
特集 家族論の基底
予告

1982年6月1日 印刷
1982年6月1日 発行

女性史研究 第14集

頒価 500 円
(送料実費)

編集 家族史研究会
東京事務局 東京都中野区新井4-27-6-801
☎165 Tel 東京(03)385-0147
振替口座・東京 3-12894
熊本事務局 熊本市池田3-2-30 犬童方
☎860 Tel 熊本(0963)54-6158
振替口座・熊本 13171
家族史研究会熊本事務局

共同体社

